大12年
11月
(9~10月)

目次

帝都復興の大詔……本多日生
大慘害に當面せる國民の覺悟……本多日生
信仰と感激……本多日生
國防上の急務……細野辰雄
大法鼓經講義……本多日生
關東大震火災……
法華經要文講義……本多日生

第廿七年十一月號

帝都復興の大詔

朕神聖ナル祖宗ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成跡ニ鑑ミ皇考中興ノ宏謨ヲ繼承シテ肯テ愆ラサラムコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ニ祖宗ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空前ノ大戰ニ處シ尚克ク小康ヲ保ツヲ得タリ爰ソ圖ラム九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ潰倒男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リテ炎燄天ニ沖リ京濱其他ノ市邑一夜ニシテ焦土ト化ス此間交通機關杜絶シ爲メニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其ノ慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄慘ナルヲ想知セシム

朕深ク自ラ戒愼シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其宜ヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲ニ多衆災民ノ安固ヲ脅カスカ如キコトアラハ人心動搖シテ底止スル處ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂惕シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ道ヲ講セシメ先ス焦眉ノ急ヲ拯ウテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ擧ケント欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スル所ナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メスト雖モ依然トシテ我カ國都タルノ位置ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我カ忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其ノ慶ニ賴ランコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノ事ヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬遺算ナキヲ期セムトス在朝有司能ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ禁遏シ民心ヲ安定シ一般國民亦能ク政府ノ施設ヲ冀ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ム可シ朕前古無比ノ天殄ニ際會シテ邦民ノ心愈切ニ寢食爲ニ安カラス爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年九月十二日

内閣總理大臣各省大臣副署

大慘害に當面せる國民の覺悟

本多日生

一、緒言

去る九月一日東京横濱其他の地方に起りました大慘害に就て、吾々國民は如何なる覺悟を定むべきかと云ふことを御話しして見たいと思ふ。今度の大慘害は一地方の出來事に非ずして、我が國家の全體に及ぼす大事變であります。故に災害地は勿論、其以外の地方に住居する一般國民も、等しく健實なる覺悟を要するのであります。そうしてその覺悟の内容を銑錬して、廣く且つ深く徹底せしめ、一時的の緊縮氣分でなく、永續的に國民の氣風にまで作り上げねばならぬと思ふのであります。

二、精神的指導者を要す

我が日本人は災害以前より人心の頽敗を來し、思想は動搖し、奢侈逸樂の風を生じ、慥に修養訓練を缺いて居つたので、早く既に精神的指導者の必要が起つて居つたのであります。然るに國民の自覺は此點に於て特に缺けて居つた爲に、今度の大慘害に就ても、天災以外に人心の缺陷が加はつて、其の被害をして非常に强烈ならしめたのは事實である。或人の云ふ所によれば、天災による被害は總被害の約二十分一であつたであらうとの事であります。故に斯樣な國民は大慘害に當面しては、更に一層の修養訓

練を要するのであつて、それには理想的なる精神的指導者を普く國民の心理に打込み、起居動作の間にその指導者と離れない樣に導く事が、何よりも大切なのであります。

過般來朝せられた都市計畫の泰斗ビアード博士は來朝早々其の意見の大要を發表せられたが、其中に「桑港の震災後尤も大切であつたのは、精神的指導者であつた。最初はそこに氣がつかないで有形の恢復に熱中して居つたが、戒嚴令撤廢後に掠奪が起り、混亂の巷となつて、折角恢復しかけた桑港は再び非常な困難に陷つたのである。故に何よりも大切なのは健全なる精神的指導者を得る事である」と云ふのであつたが、我輩はこの說に深く共鳴した一人であります。そうして今日の我國民の精神的指導者は、單に軍事的、經濟的、又は政治的の指導者では事が足りない、人心に修養訓練を與ふる上から見て、理想的なる精神上の指導者を各人の腦裡に與へなければならないのである。

三、立正太師を推薦す

この精神的指導者として予は立正大師即ち日蓮上人を推薦するのである。それは種々の理由によつてその適當なる事を認むるのであつて、決して立正大師の爲に立正大師を推薦するのではない、我日本國の爲め、我日本人の爲に立正大師を推薦するのである。今推薦の理由を列擧しますれば、

一、時代の背景が同じき故に推薦するのである。

それは立正大師の著作、立正安國論は其冒頭に記して云ふ、「旅客來つて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで天變地夭、饑飢疫癘逼く天下に滿ち、廣く地上に迸る、牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半にいたる、之を悲まざるの族敢て一人も無し」と。又勸文由來には「去る正嘉元年八月廿三日戌亥の刻の大地震を見て之を勸ふ」とあつて、有名なる立正安國論の緣由が大震災にあつた事から見ても、立正大師の敎化が大慘害に當面せる國民に適切である事は見易き事であります。

二、剛健困難に打ち克つが故に推薦するのである。

今度の大慘害の損失を恢復し、更に國運の隆昌を期せんとするには、何よりも先づ國民は剛健なる氣風を喚起し、如何なる困難にも打克つ力を要するのであるが、立正大師は一代を通じて、その時代の國家社會が受る困難と、彼自身の上に來る困難とに打克ち、最後に「立ち渡る身の浮雲も晴れぬべし、妙の御法の鷲の山風」と歌つて、凱歌を奏せられたる勇ましき行動は、慥に大慘害に當面せる國民を導くに於て、尤も適當なる精神的指導者なりと信ずるのであります。

三、健全なる信仰を與ふるが故に推薦するのである。

今度の大慘害は頗る深刻であつて、唯通常の修養訓練のみではその効果を奏し難く、又今度の災害を機會に民心に健全なる信仰を喚起する事は、極めて緊要の事なりと思ふ、然るに立正大師は其の信仰の强烈にして、其の內容の健全なる點に於て、慥に我國民の指導者なりと信ずるのである。

四、凜然たる道義心を示す故に推薦するのである。

我國民は災害以前より道義心の缺乏に陷り、爲に諸種の忌むべき現象が頻發したのであつたが、今度の大慘害に遭遇して、尙且つ道義的に醒めなければ、其の害は今日の事に止らずして、遂に社會の秩序を

失ひ、國家の獨立をも危くするに至るかと思ふ、故に今度の大慘害を機會として、廣く國民をして凛然たる道義心を涵養せしめねばならぬ、此點に於ても立正大師の一代の言動は慥に今の國民を指導する最適任者であると思ふ。

五、國家本位の大思想家なる故に推薦するのである。

思想問題の範圍は廣く、種類は多いが、其の中堅をなすものは國家觀の相違に外ならない、よし他の思想に於て健全の如く見ゆるとも、國家本位の觀念を失はゞ、思想問題は當然失敗に歸するかと思ふ。而して災害前より押し寄せたる思想界の傾向には國家觀念を失はしむるが如き諸種の忌むべき言動を見たのであつて、若し大慘害に當面せる我國民が、依然として、國家本位の觀念に就て徹底と堅實とを缺くならば、眞に由々敷大事なりと思ふ。然るに立正大師は諸種の思想を調節して、悉く之を國家本位の思想に歸納したる大思想家である、故に此點に於ても立正大師が精神的指導者として唯一人者なる事を信ずるのであります。

六、豫言的大警告者なるが故に推薦するのである。

今度の災害は頗る大きいが、されど國民にして覺醒する所あれば禍が却つて幸の種となるかも知れない、それには更に大災害の來るべきを示して、國民に警告するの必要があらうと思ふ。此點に於て立正大師は豫言的大警告者であつた、詳しい事は後に話そうが、予はこの意味に於て立正大師を推薦するのである。

七、强烈なる感化力を有するが故に推薦するのである。

我國民は道義心の摩滅せる上に於て通常の感化を以てしては最早や覺醒し難きかと思ふ。立正大師は其の感化力强大にして、之に觸るれば必ず改過遷善せしむるの力を有す。この點に於ても立正大師を推薦するのである。

四、禍を轉じて幸となすを要す

大慘害に當面せる國民は前段に述べたる精神的指導者を得て、剛健堅實の氣象を養ひ、如何なる困難にも打克つの覺悟を定め、勤勉努力の中よりより多く產出を計り、而して他面には生活を改善して簡易質素の風を養ひ、より多く生產してより少く消費することゝし、以て今度の損失を恢復せねばならぬ。そうしてその勤勉と節約との實行に當りては、決して之を厭ひ、之を嘆くが如き心を懷いてはならぬ、否喜び勇んで勤勉し、節約を實行すべきである。そうして其の喜び勇んで之をなすべき心的原動力は尤も重要の事であるが、この力を與ふる上に立正大師は尤も適當せる指導者であると思ふ。それは上人の時代は天變地夭、饑饉疫癘並び起り、切に至つて、社會は頗る困難の狀態に陷り、又內憂外寇競ひ起つて國運の危殆を思はしめたのである。又大師自身に取つては法難迫害踵を接して非常なる困難と、缺乏の生活の間に終始されたのであるが、而も曾て剛健の氣象を失つた事はない。一難來る每に勇氣更に加はり、如何なる悲慘な生活の中にも欣々然として活動を續けられたのであつた。それは大師の懷ける理想が遠大であり、且つ明確であつたからであります。今の我國民は利己的に陷り、其理想が低劣なるが故に、勤勉と節約との實行に力を得難いのである。彼等は自己の物質的享樂を目的とするが故に、勤勉と節約とが直ちに目的を害する事となり、よし之を實

行するとしても非常に苦痛を覺え、之を嘆き、之を厭ひ、到底持續し得ないのである。此の病弊を根本より救はなければ今度の災害の恢復は覺束ないのであるが、唯表面の經濟恢復や、都市復興のみを考へても、この心的缺陷を匡救しなければ、決して堅實なる恢復は出來難い事と思ふ。故に國民が從來の區々たる感情や、淺近なる理智に甘んぜずして、翻然醒めて立正大師を精神的指導者と仰ぐべきであり、又仰がしむべく我等は努力しようと決心したのであります。

五、健全の信仰に復るを要す

今度の大慘害が天意に出でたと云ふは、神秘に屬する解釋であつて、或は反對する者があるかも知れんが、災害の中に現れて居る事實より見ても、健全なる宗教の信仰に復らねばならぬ事が頗る明白であると思ふ。それは初めに申述べた天災よりの損害は全損害の約二十分一と云ふ事より考ふれば、その大部分の被害は人心の修養訓練の足らざる結果であるが、その修養訓練の根本に於て宗教の信仰を缺いて居つた事が大關係をもつと思ふ。彼等が地震の爲に懷いた恐怖心が餘りに强かつた事と、又利己的に流れて發火を打消す事を忘れたり、避難するに當り雜然混亂の狀を呈し、逃げ惑ふて多くの被害者を出し又燒死し、壓死し、溺死する者が最後の刹那に於て宗教的信仰を有せざる爲に受けたる苦悶苦痛の樣は如何にも同情の涙に堪へ難き次第である。のみならず彼等の慘死者は佛教に云ふ俱業所感であつて、全國民の受くべき慘害を代つて受けたる者と見なければならぬが、心一度此點に向へば實に生殘つた國民

は堪え難き同情と感激とを持たねばならぬ。此の同情と感激とは唯の道德的眞理では安ぜらるべきものでない、必ず宗教的信仰にまで達して、一は以て死者を葬ひ、一は以て功德善根の心に醒めて、彼等をして犬死たらしめない樣心掛け、かくして初めて漸く各人の心は安んぜらるゝかと思ふ。若し死んだものは罪が深かつたのである、此災害に遭はない人達は罪が淺いのだと云つて、冷然として過ぎ去るならば、決して健實なる覺醒は起らないであらう。故に此際は大に宗教心を喚起して、信仰を國民覺醒の中堅としなければならぬ。又他面より觀察すれば、物質的の文化は殆んど頂點に達し、あらゆる建築其他都市の設備は發達しつゝあつたが、數分間の震動によりて、諸ての機關は破壞せられ、遂に我國の政治經濟、文化の中心たる帝都は、燒け野原と化し終つた。而して物質にのみよりて生きたる人々は、一朝にして家を失ひ、產を失ひ、衣服を失ひ、蒲團を失ひ、諸ての器具を失ひ、又父母妻子兄弟離散して生死不明の悲みを懷くに至つたのである。此の一大破壞力は何を意味するかと云へば、人間が物質のみによつて生きんとする現代文化の傾向は、慥に誤つたものである事を頗る明瞭に示されたものと思ふ。此點より考へても國民は精神生活の中軸たる宗教の信仰に復らねばならぬ。我立正大師は頗る健全なる信仰を喚起したる宗教家であつて、諸種の困難に遭遇してよく信仰の力を示し、宗教の偉力を發揮したる聖者である。故に上來述べ來つた物質偏傾の文化より醒めて、精神生活を中軸として建設する文化の指導者であり、又國民が今度の如き事變に遭遇する時、泰然として擧措を誤らざらしむる教化を與ふる

ものであります。

六、凛然道義心に復るを要す

國民が倫理的情操を失ひ、又思想が動搖して適從する所を知らざるに至れば、其の社會、其の國家は斷じて健全なる秩序と發達とを見る事は出來ない。然るに我國民の思想は災害前より道義心頽廢し、思想混亂に陷り、頗る憂ふべき徵候を呈して居つたのである。其の一二の例を擧ぐれば、かの有島事件の如き、戀愛至上の思想を懷いて、親を捨て、子を捨て、夫を捨て、理想を捨て、目的を捨て、責任を忘れ、單に戀愛の奴隸となりしものに對して、民衆全體の批判は頗る不正確に陷り、滔々として戀愛至上の讃美者を出すに至つたのである。又社會主義者を生じ、國家觀念を呪ふものあるに至つたのである。

或人は社會主義に硬軟二派あり、硬派は憎むべきも軟派は其の理想敢て責むべきに非ずと云ひ、自ら社會主義に精通せりと誇るも、これ決して社會主義に精通せるものに非ず、社會主義の特色は、國家組織を目して社會進化の道程に過ぎずとなし、今や國家組織の文化は時代遲れなりと論じ、國家觀念を嘲り國家本位の思想を傷くる點に於ては硬軟の別あるを見ず。直接行動の社會主義の兇暴なるは云ふ迄もないが、よし温和なる社會主義と雖も、國家本位の思想より見てその誤れる事は極めて明瞭である。然るに我國民は三千年間養ひ來れる克く忠に、克く孝にの美風を忘れて、時々戀愛至上の病見に屈從し、時々社會主義の謬想に附和し、かくして凛然たる道義感情を失ふに至つたのである。無論之等の謬見は國民の或一部に過ぎないけれども、而も社會の表面には喧々囂々として、その全面を蔽ふかの觀を呈したのであります。若し天の懲罰を受くるとせば、この道義的感情を失へる點に向つて天譴は下つたものと思ふ。然るに大慘害に當面せる國民にして、尙且つ道義的反省を起さなければ、我國家の前途は眞に危ふいものと思ふ。この點より見て立正大師の敎化は頗る適切なりと感ずるのである。立正大師は孝養の德を體現し、母を蘇生せしめし程の孝養的熱誠を示し、又國家本位の思想に至りては立正安國の主張を以て一貫し、我れ日本の柱とならんと疾呼して大に道義的感化を起せし偉人である。故に立正大師に接近するものは何人と雖も道義的情操を復活して、滔々たる世の惡風潮に動かざるゝ事はない。故に大災後の國民の精神的指導者は、立正大師を以て最適當の人と信ずるのであります。

七、國家觀念を養ふを要す

前段述べたるが如く、倫理的觀念の中堅は國家本位の思想に存するのである。現代思想の動搖は多種多樣なるが如く見ゆるも、其中心の問題は國家觀念を旺盛ならしむるの一途に存す。或は己人の權利利益を骨張して、國家保護の恩を輕んじ、國家統率の眞價を知らず、或は人類博愛の思想を力說して、國家の區域を無視せんとし、或は社會共存の一途を偏重して國家組織の文明の實相を忘れ、かくしてあらゆる方面より國家觀念を動搖せしめんとしたのである。之等は何れも一局部の必要に沒頭して文化の全體を達觀するの明を缺いて居るのであります。己人の權利利益を適當に保全し、伸張せしむるものは理想的國家の中にまたなければならぬ。又人類全體

の幸福を實際に保全せんとするにも理想的國家の健實なる發達により、國際的文化の進歩に俟つより外ないのである。又社會共存の事實も國家的統率保護の中に於てのみ其實を擧げうべきものにして、何等の統率なく、秩序なき社會には斷じて共存相扶の社會を實現し得ないのである。何れにしても理想的なる國家の健全なる發達によりて、内にも、外にも眞の幸福と平和と光明とを實現しうるのである。我が大日本帝國の國家的目的、理想、職分は、明に如上の意義を有するものであると信ずる。然るに此の國家本位の思想を會得する能はずして、一局部の偏見に陷り、轟々として論議し、三千年來養ひ來つた我國民性の美點を破壞し去らんとしたのである。此點より見るも立正大師が現代人の精神的指導者として最適當なる事が明かなのであります。立正大師は佛敎に精通せる聖者なれば、己人の幸福を思はるゝは勿論、社會共存、人類博愛の思想に於ても無論十二分の考察を有せらるゝは、一點疑の存せざる所である。然るに此等の思想を更に銑鍄して國家本位の大主義に統一せられたのである。故に宗敎を論じては「彼の國によかりし法なればとて、此國にもよかるべしと思ふべからず、法は國を鑑みて弘むべし」と說き、又「一身の安堵を思はゞ、先づ四表の靜謐を祈るべきものか」と云ひ、又「一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事なり」と示し、かくしてあらゆる思想を調和統一して、最後に國家本位の大主義を確立明示せられたのである。今の我國民は狹隘なる國家主義、淺近なる國家主義に止まるべからざるは勿論、又前に擧ぐるが如き誤れる己人主義社會主義、博愛主義に墮落してはならないのである。

何れにしても國民が區々たる感情を捨てゝ、立正大師に拜跪するに至らば、確に現下の一大災厄は救はるゝと信ずるのであります。

八、後の災厄に備ふるを要す

災難は決して今度の地震と火事とに止るものではない、貧すりや鈍すると云ふ諺があるが、一つの災難に出遭ふて適當な覺醒が起らなければ、引續いて更により大なる災厄が起るものである。我國民を眞に警醒するには、今度の災害が災害の全部であつたとしたのでは、眞實に醒めないかも知れない、それ故により大なる災厄を考へて見るの必要がある。それは内に於て民心の統一がいよ〳〵破れて、同志討の狀態を呈し、爲に社會の秩序が保たれなくなる事、外には國際の關係が平衡を失して、戰雲愛〳〵の場合を云ふのである。此の内外の國難が競ひ起り、並び至るならば、國民全體の悲慘は、決して今度の災害の比ではなからうと思ふ、所が此の内外の大災厄は何人と雖も必無の事と斷言し難き狀況にあるであらうこゝに我國民は一大覺醒と、一大覺悟とを要するのである。或人は少しも早く國民に安心を與へて、帝都復興の事は易々たるものだ、決して憂慮するに足らん、先づ野外劇でも見たり、活動寫眞でも見せ、笑はしておいたらよからうと考へて居るようであるけれども、それは極く淺近な考であると思ふ。或る一部の罹災者中の幼稚な低劣なものに就て考へればそれも惡い事でもあるまいが、國民全體を啓發し、指導する大方針から考察すれば、そんな事では役に立たんと思ふ、寧ろ一大警告を與へて、眞實決心せしむる所がなくてはならぬ。それは今迄のような國

民の浮薄なる思想では内外の大災厄が續いて起るものと云つても、決して空想ではなからうと思ふ。この豫言的一大警告が我國民に取つては尤も必要なりと信ずるのである。此點に於て立正大師は立正安國論に天變地夭、饑饉疫病は、之れ尙國難の序幕にして、天の慈愛深き警告に外ならない、この警告に醒めざれば續いて來るものは自界叛逆、他國侵逼の二難なりと絶叫し、立正安國論には「藥師經の七難の內五難忽ちに起り、二難猶殘れり、所以る佗國侵逼の難、自界叛逆の難なり。大集經の三災の內二災早く顯れ、一災未だ起らず、所以る兵革の災なり。金光明經の內種々の災過一々起ると雖も、佗方の怨賊國內を侵掠する、此災未だ露れず、此難未だ來らず。仁王經の七難の內六難今盛にして一難未だ現れず、所以る四方の賊來りて國を侵すの難なり。加之

す、國土亂れん時は先づ鬼神亂る、鬼神亂るゝが故に萬民亂る。今此文に就て具に事情を案ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ、先難是れ明なり、後災疑はん、若し殘る所の惡法の科に依つて並び起り、競ひ來らば、其時何か爲ん哉。帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ、而るに佗方の賊來つて其國を侵逼し、自界叛逆して其地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に疑がざらんや、國を失ひ、家を滅せば、何れの所にか世を遁れん、汝一身の安堵を思はゞ先づ四表の靜謐を祈るべき者か」と云つてある。此の如く立正大師は豫言的一大警告を發せられた點に於て、精神的偉大なる指導者である。今日の我國情に就ても、內憂外患の眞想を指摘して、國民思想に覺悟を促すが大切だと思ひますが、今はこの後の災厄に關する內容を詳細に述ぶる事を得ないのを遺憾とするのであります。

九、人心の惡化を救ふを要す

修養訓練を缺いた我國民は、今度の大慘害に當面して、決してよき心的結果を來さないかと思ふ。それは災害と同時に起つた諸種の犯罪に見ても、又流言蜚語に惑はされた事より見ても、又掠奪橫領兇暴落膽等の心的徵候に見ても、又一時元氣を出して或る仕事に着手しても、被害の甚大なる爲に思ふ樣に其の事が成立たざる時、其間より諸種の心的缺陷を曝露し來るかと思ふ。故に此際は强烈なる精神的感化力を有する指導者を得て、之を敎化善導せなければ、或は豫想外の困難を續發して、遂に捨收すべからざるに至るやも計り難いのである。其の細密なる事はこゝに述べないが、深く考慮をこの點に廻らすと、眞に戰慄すべき事があらうと思ふ。故に唯表面の物質的復活のみを以て足れりと思ふてはならない、何よりも精神的指導者を重んじ、從來の盲目的感情や、淺近なる科學の理智や、法律萬能、經濟萬能、政治萬能、敎育萬能の夢より醒めて、立正大師の如き理想的なる指導者を廣く國民一般に奉載せしめ、悟寂の間にもこの偉人と共に在るの信念に立たしむるを要するのであります。（終）

1/2年
2月

信仰と感激

本多日生

四、確信と感激

然らば最初に申した不動、確信――この信心の體であるところの確信と感激との關係がどういふ風になつて居るか、一切經なり日蓮聖人の遺文なりの上に於て最も著明なものに依つて、この事を考へて見たいと思ふのであります。

先づ釋尊に於ては、降魔成道のところが非常な大事であつて、惡魔がやつて來て悉達太子を誘惑するその惡魔を蹴破つて遂に佛にお成りになつたのである。本佛としての釋迦如來から考へればそんな事は問題にならぬけれども、兎に角八相成道の儀式から言へば、悉達太子があらゆる誘惑を打破つて佛に成られたといふ事になつて居るのである。それはいろ〳〵の誘惑があらはれて、或は美人となつて悉達太子の前にあらはれて之を誘惑し、或は劍を以て之を脅迫し、其の外お父樣の使だといつて手紙を持つて來たり、樣々の誘惑がありてなか〳〵忍び難いやうな事もあつたけれども、悉達太子は少しも心を動かさずして、正念不動三昧を續けられた。如何なる惡魔が來ても我は正念不動三昧に入つて居るが故に、此の精神は動かすことは出來ない、汝等が如何に雨の如く劍を降らしても、我が精神は一毛髮だも動せず、髮の毛一本も我が心は動かぬ、さうして心の動かぬ事を、お釋迦樣は、胸に生へて居る此の胸毛が動かぬといふことを始終言はれる、心にハッと思つたならば、必ず胸の毛がブル〳〵と振動を起す、我が心の動かぬ證據は、汝等見よ、我が此の胸憶に在る毛一本も動かぬだらう、況してや我が精神をや、といふ風に言はれる、實に勇ましいところである。胸をグッと開いて、どうだ、此の胸の毛が動き居るか見い、此處にある毛筋さへ動かぬのだ、況んや此の内に在る我が精神は金剛鐵石の如く、少しも動かないぞ、何でも持つて來いといふ、其の正念不動三昧に依つて彼は佛樣に成り得たといふのでありますが、それは何處から來て居るかといふと、感激から來て居るのであります。即ち悉達太子の人生觀は、四門出遊といつて、四つの門から巷に出でて見たことに依つて、そこに悲慘なる人生の苦しみをマザ〳〵と眺めた。第一の門を出でては老人の道を行くのに出會つた、あゝ憐れな有樣ではないか、腰は弓の如く曲つて、喘ぎ〳〵お爺やお婆が道を歩いて居る。「人間は年を老ればみんなあゝ成るのか」「それは誰でもあゝなります」「ハハアこれは人生の榮華は一時の夢である、或る時間を經過すれば憐れなる老衰の境遇に至るものぢやナ」といふ事を深く感じた。實に人生は今も昔もその通りであつて、花を欺きし美人も年を老つて腰が曲り、齒が脫けて聲がフガ〳〵になつてしまへばモウそれ限りである、觀樂の巷に醉うた夢は醒めて、老衰の悲哀が之に代るのである、これは實に憐れな事であらうと思ふ、話をされてもそれが聞えぬやうになつて「それは何ぢや……フガ〳〵」といふやうな事になつたならば、人生は實につまらぬ事になる譯である。若い者の仲間に入らう

とすれば邪魔にされて「お祖母さん早くお寝みなさい、床は敷いてあります」「フガ〳〵……」……これでは迚もかなはぬでせう、實に老衰の悲哀は人生を苦しめるものである。如何なる人間も宗教の信仰の力、法悦の力を有たない限り、富める者も、榮えたる者も、美しい者も、みな最後は此の悲哀の涙に咽ぶのである、あゝ如何にも人生は哀れなものぢやナといふ事を悉達太子は見透した。どうぞして此の人生すべてを襲うて來るところの悲哀を救うてやらなければならないと、此の人生觀から彼は進んで行つたのであります。それから又死の恐るべき事も容易なことではない、其の本人に取つては一切の仕事を打壞してしまひ、希望を燒いてしまふ譯である、死んだ先まで魂が續いて行くといふやうな事から考へればだけれども、現在に目的を置いていろ〳〵な事業をやつて行き居る、その事業は、命を取られることに依つて中斷されてしまふ。一切の事は生命を斷たれたるときには萬事已みなんで、悉く破壞に終るものである。政友會の原總裁にしても、まだ〳〵是からいろ〳〵やらうと考へた事もあつたであらうけれども、一たび東京驛頭に刺されては、萬事それ限りぢや、實に人間は此の死が襲ふて來た時に於ては一切が破壞に終るものである、これは誠に可哀相な事ではないか。さうしてそれが如例にも皮肉に出て來る、人間死んで良いといふ者もないけれども、お祖母さんはモウ良い年でもあるし、死んでも宜からうと思つて居れば、いつ迄もビク〳〵して居る、さうして大事な働き盛りの者が死ぬやうな事になる。或は又夫婦にしても、サウ仲の好くない者であるならば、まア別れても宜いやうなものだけけども、非常

に相愛して居るやうな者がどうしても離れなければならぬ事になる、實に性の惡いものである。人生はさういふ皮肉なものぢや、花を見ようと思つて居ると其の曉雨が降つて散つてしまふといふやうな譯で、「月に村雲花に風」人生は甚だ性わるく出來て居る。それ故に此の人生を物質的に考へたならば如何に政治を改良しても、經濟を改良しても、それのみではうまく行くものではない、歐米の人々が現實の歡樂にのみ醉うて享樂主義を謳歌し、人生を其の儘天國にしようとして非常な物質的の進歩を圖つたけれども、それは却つて多くの人を惱める元になつて居る、其の歡樂に醉ふ者は少數であつて、其の席に臨むことの出來ない多數の者は、怨を懷いて石を投げるやうな事になつて居るのである。これは日本で言つても帝國劇場のやうなものが出來て、そこへ行つて芝居を觀たら面白いといふけれども、それは觀られない者の方が世の中には多いのである、そこへ行つて芝居を觀る人間は百人の中の四人か五人で、あとの九十五人といふものは帝劇の名を聞いて帝劇の内に入ることが出來ない、であるからあゝいふやうな物がさかんになれば、一部分の者は歡樂に醉ふけれども、大多數の者はあの宏壯な美麗な建物を睨んで手に石を握つて居る、モウ少し烈しくなればそれをパッと打つけるやうになるのである。決して物質的の快樂は其の終りは全いものではない、非常なえらい事になつて行くものである、遂には露西亞のやうな工合に、貧富の差別に對しては富者を呪ひ、上下の關係に就ては身分ある階級の者を呪ふことになつて來る、此の呪ひの聲はなか〳〵強い有樣であらはれるものである。だから此の階級は成べく

大12年
12月

緩和して行かなければならぬ、貧富の關係も成べく緩和して行かなければならぬ。さうして其の根本には大きな精神的の教化が伴はなかつたならば到底いかない、そこを釋迦如來が御覽になつた。要するに悉達太子は此の人生觀に於ける感激が大である、釋尊の惡魔を退治し得たる力は、深き〳〵徹底したるところの人生觀に對する感激を以て之に打ち勝たれたのである。たゞあれが感激なくして、一つ修養を積んで見ようとか、何か一つ考へて見ようか位ならば、惡魔の誘惑のために忽ちやられたであらう。いくら惡魔がやつて來ても、我は此の大願を成就せんければ決して此の座を起たぬ、からだは寸斷にされても此の座は動かぬといふ、それは非常な强い勢ひで其の事を言うて居る、それ故にそれを金剛の座と稱して居る、正念不動、人生觀の感激を以て惡魔に對抗した、其の座を金剛座と言ふに至つた。何も金剛石があつた譯ではないけれども、悉達太子の精神が强いが故に、軟らかな草を敷いて坐つて居られて其の軟らかな草、それが金剛である、これが信仰の模範である。諸君が佛檀の前に坐つても、其の信仰の燃えた時には、それが疊であらうが蒲團であらうが、此の信仰を載せて坐つて居る俺の蒲團は、君はたゞのメリンスの蒲團と思ふだらうけれども、これは此の儘吾輩の精神に於ては金剛鐵石の如きものぢや、釋尊の金剛法座をうつして俺は此のメリンスの蒲團の上に坐つて居るのぢや、斯ういふ考が信仰の上に湧いて來なければならぬ、そこが實に面白い宗教の妙味である。

隨つてそこに力を生じて來る、よろこび其の内に湧き、さうして前に言ふ所の苦しみを除いて法樂を

得るとか、穢惡を除いて正善を積むといふやうな力がそこに現はれて來る。釋迦如來の如く成道を遂げて一代五十年の大化導、滅後三千年に及んで尙は其の法益が滅びないといふやうな大事業は、この釋尊の感激の精神の中から來たものである。どうしても一切衆生を救はずんば止まぬ、此の憐れなる衆生を何を以てか救はんといふ所の、この濟度の精神が徹底して居るが故に起つた事である。それは人生觀に對するところの感激である、宗教家に本當にえらい者が出來るのは必ずそれである。此の人間を觀てこれで結構だと思つて安心するならば、それは人間に甘んじてしまふのである、人生は白酒を飲んで桃の花を見て居ればまことに結構だ、成べく餘計白酒を飲んで、成べく度々桃の花を見て……といふ事であるならば、それは商賣に精出して金を儲けて行きさへすれば宜いのであつて、決して宗教には來ない、そこに、或は白酒を飲み桃の花を見居るけれども、其の歡樂の裡に彼等は非常な悲哀を感ぜざるを得ないのである、決してそれだけで人生の滿足が得られるものではないといふ事を見通して、物質的の幸福快樂の奥に潜んで居るところの人生の悲哀、非常な皮肉なところの人生の悲劇を看破して、そこに宗教は起るのである。生ぬるい所の、春は花咲き鳥囀づるといふだけの表面の事で人生が濟むものならば、宗教は要らないのである、梅の木でも餘計植えて、さうして鶯でも澤山飼つて置くか、小鳥でも飼つて置けば、朝からピー〳〵ケキヨ〳〵……それで人生が濟むなら宗教は要らぬ。けれども如何にさういふものを殖やしても、それだけで人間の幸福は滿たされない、そこに宗教の必要が起つて來るのである。

日蓮聖人の確信についての感激は數多いことでありますが、殊に法と國との冥合、所謂法華經と日本の國は不思議な因緣があつて、洵に密接な關係を取る、法華經によつて日本の國は彌や榮えに榮えて行く、日本の國の力を得て法華經はます〳〵發展をする、法國相たすけて行くものちやといふやうな事柄に關して、聖人は深き感激を有つて居られた。それは理論としての研究から來たばかりでなく――理論としても無論法華經が日本の國をたすける力がありと日本の國の力によつて法華經を榮えしめるといふ事も說ける話だけれども、さういふ表面上の理窟ばかりでない、一種神秘的に此の法華經と日本國は不思議な因緣を以て結合して居る、それは日本の國のはじめに神樣が正しいものをお求めになつて、その神樣の思召が自から法華經を迎へ入れる國になつて居る、敬を歡迎するところの神樣である。神樣にもいろ〳〵あつて、敬などは要らぬ、どぶろくを持つて來いといふ神樣もあるけれども、日本の神樣は此の正しき道を愛せられ、正しきものに依つて日本を進めて行かうとせられる。それ故にいろ〳〵の託宣などがあつて――中には嘘の託宣もあるけれども、正しい託宣として日本の神樣の思召を傳へたものは、日本の神樣は佛法の興隆をよろこばれ、伊勢の大神に於ても又石清水の八幡に於ても、法華經の榮えて行くことを皆御よろこびになつたといふ事は正しい歷史の傳ふる所である。永い間、千數百年間、それに依つて日本の神々は皆佛法を愛せられた、神々に佛法の法味を捧げ來つたものを、明治維新の時に神佛混淆相成らぬといふことに依つて廢めたけれども それ迄の千數百年間は神樣と佛法とは結合して居つ

たものである、それは日本の神樣の思召が正しき敬を迎へられたからである。それから法華經はまた日本の國によつて燦んになる因緣があるといふのは、法華經の翻譯者羅什三藏か、その翻譯をし終つた最後に法華經の跋文を書いて居る。今日世間に行はれて居る法華經には出て居らぬけれども、大藏經の中の法華經にはちやんと終いに「法華翻經の記」といふものが出て居る、つまり法華經翻譯に關する記錄を書いて、これを法華經の跋文としてある。それは最初羅什三藏が天竺に行つて須梨耶蘇摩三藏といふ方から法華經の原本を貰つた時の事が書いてある、法華經はいろ〳〵原本があるが、中に於て一番正しいのは嘗つて天親菩薩が校正をせられた原本である。印度にも法華經の原本はいくつもあつて、文字の寫し誤りの違ひなどがあるけれども、此の須梨耶蘇摩三藏が受取つた法華經が天親菩薩から傳へたもので一番正しい法華經である。今ケルン譯の法華經といつて、南條博士が持つて來た法華經があるが、それは羅什譯の法華經と違つて居る。それは普門品に於て觀音が阿彌陀樣の事を言うたり何かして居るが、さういふやうな法華經はいかぬ、又觀音が法華經の內で獨立するやうな意味に見えたり、獨立するのみならず壽量品の本佛に刄向ふところの佛を戴いて、敵軍の使みたいな事に觀音が働くならば、觀音を誅戮しなければならぬことになるから、ケルンの法華經や南條氏が持つて來た法華經は駄目である。羅什三藏の譯した斯の如き立派な法華經があるにも拘らず、今頃普門品の偈の中に阿彌陀樣の事を引張つて來て、その偈を證據にして兎や角言ふナンといふことは間違つて居る。左樣な事は斷じて出來ぬやうに

法華翻經の記にちやんと書いてある、そんなやうな異本がいくらあつても、此の天親菩薩の傳へられた法華經が一番正しいのである。それを羅什三藏は天竺に於て須梨耶蘇摩三藏から受取つて來たのであるが、その時に須梨耶蘇摩三藏が左の手に法華經の原本を持ち、右の手に鳩摩羅什の頂きを摩でて言ふには、

佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす、此の經典は緣東北に有り、汝謹んで傳弘せよ。

お釈迦様の日は西にかくれて居るけれども、そのお釈迦様の遺して置かれた光は、佛法東漸といつて次第々々に東に及ぼうとして居る、此の法華經は天竺から東北の方の國に深い緣があつて、そこから弘まるから、汝謹んでこれを傳へよと言つて、この法華經を渡された。そこで羅什三藏は之を戴いて天竺から支那へ來つて、支那で翻譯をして、さうして其の終りに此の法華經は東北の國より弘まるといふ跋文を書いて置かれた。それを日蓮聖人が御覽になつて天竺に於て東北に緣ありとは豈日本國にあらずやとお考へになつた。不思議な事に此の法華經は、須梨耶蘇摩三藏が天竺に於て羅什三藏に渡す時分から、此の經典は緣東北に有り、其の方から光を放つものであると言はれて居る、緣東北にありとは豈日本國にあらずやといふ事を看破つた時に、日蓮聖人は其の一節に至つて感激の涙に咽んで、雨眼瀧の如く喜び身にあまねしと御遺文に書かれて居る。日蓮が命に代へて弘めようと思ふ法華經が、緣東北にありで日本の國と斯ういふ不思議な緣があるといふことは日本の神々は正しき敎を迎へるといふことになつて居つたが、此の法と國とが斯の如き因緣に依つて抱き合うて、法國冥合して互に相たすけて進むといふことは、こんな嬉しい事はない、其の悅びの涙、雨眼瀧の如しと書かれた。瀧の如しとはちと激しいけれども、併しそこに聖人の精神があらはれて居る、よろこびの涙が滂沱として瀧の如く流れたといふ、さうして喜び一身にあまねしで、からだ中に喜びが滿ちてぢつとして居れないといふ所の、此の感激のよろこびを加へて立正安國の主張となり、決國冥合の活動となつて居るのである。たゞ法と國とはたすけ合ふものぢやといふ冷かなる所の理論から來て、法華經を思ひ、國を思ふといふのでなくして、此の感激、雨眼瀧の如しといふ熱誠を以て、法と國との結合のために努力したのが日蓮聖人の一代である。であるから其の話が如何に良くとも、その話の良いところに感激が拔けて居つては駄目であるから、其の法華經と日本國とが相たすけるといふ此の正しい理論のそこに一種の特別なる感激の涙を流す、これが宗敎の妙味であり威力である。

又成佛の事に就ても日蓮聖人は無論感激を有つてお居でになつた、

如何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘れ
無一不成佛の御經をたもたざらん。

每自作是念は壽量品の終いに釋迦如來が「每に自から是の念を作す、何を以てか衆生をして」と說かれて、如何なる者でも此の本佛の慈悲に依つて救つてやらうと仰せられて居る、此の佛樣がどうぞして一切衆生を救つてやりたいとお考へになつて居る大慈大悲の事を思へば、實にそこに感激せざるを得ぬ、こちらは兎もすれば佛樣の御恩を忘れて欠伸をしたりするけれども、佛樣の方は每に自から是の念を作

す――どうぞして救つてやりたいと思ふ慈悲は片時も忘れぬぞと言はれる、此の經文を拜しては感激せざるを得ぬ。「如何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れん」で、今日は花見だから忘れて宜い、今日は芝居を見に行くんだから忘れて宜いといふ事は無い、如何なる日と雖も朝顔を洗つて南無妙法蓮華經と唱へた時には、先づ一番に本佛の大慈大悲に感激しなければならぬぢやないか。さうして又「無一不成佛の御經を持たざらん」で、一人として成佛せざるは無いと仰せられた此の結構な法華經を信じて居るのだから、女人も成佛し惡人も成佛し、一切成佛の出來る結構なる法華經を信じて、そこに確信を持たぬといふことはない、實にそこに力强く成佛の事柄も感激を以て論せられて居るのであります。法華宗の者はよく成佛々々といふことを口では言ふけれども、そこに確信が弱いと私は思ふ、前年法華の餘程熱心な信者の集會があつた時に、私は「君達は成佛といふ事をさかんに言つて居るが、成佛したらどんな工合になると思つて居るか、面倒な言葉や理窟は捨てゝこんな工合だといふ有の儘の精神を聞きたい」と言つた。ところが二三十人寄つて居つた餘程えらい信者が「ちよつと待つて下さい」「イヤ待たぬ、君等は常に成佛々々といふ事は口癖のやうに言つて居る、其の自分が成佛した時に斯ういふ工合だといふ事が言へぬ筈はない、待つて呉れといふやうな事はいかぬ」と言つたけれども、なか〳〵答辯が出來ない。法華宗は佛樣に成る〳〵と言ひ居るけれども、佛になる意識といふものが非常に不透明である。それだから成佛のよろこび、成佛の覺悟といふやうなものが、非常に薄らいで居る。淨土宗や

眞宗などの方が、往生といふたら斯ういふ有樣で行く〳〵のぢやといふ事は餘程よく意識して居る。意識して居る證據は、お彼岸などでも各地へ行つて御覽なさい、法華宗のお寺より眞宗のお寺の方が參詣が多い、法華宗は迷信的の事によつては隨分參詣をするけれども、本當に自分自身が成佛をするといふ事に於てはなか〳〵お寺へ詣らない、鬼子母神樣などでも成佛といふ事には緣が無いでせう、成佛の願でもあつたら鬼子母神樣の方で「ちよつと待つて呉れ、俺もまだ成佛して居らぬのだ、是かち一緒に行かうぢやないか」といふ事になる。柴又の帝釋樣でもナンでも、法華宗の迷信になつて居るところのものは皆さうぢや。能勢の妙見でも、或は高松の稻荷でも熊本の清正公でもみな佛になつて居ないものである。佛に成つて居ないものを拜んでそれで濟んで行くといふのは、自分が成佛といふ此の宗教の最高の希望を忘れて居るからである、其の位だから迚も成佛の意識といふものは明かになつて來ない、それ故に下等な宗派からでもやられてしまふ、成佛といふ事も忘れて居るから、それは基督教の天國にも及ばなければ、淨土宗の淨土にも及ばぬ、淨土や天國といふ事の意識といふものが一つも無い。「お前成佛したらどうなるのだ」「そりや娑婆即寂光だ」「娑婆即寂光つて何處が寂光だ」「此處が寂光だ」「此處が寂光だつてお前家賃が滯つて店だてを喰つて居るぢやないか」「店だてを喰つたつて何だつて寂光……」……無茶ばかり言つて居る。そんな嘘の教義を安本丹の坊主どもがみんな敎へたのである、無學にして娑婆即寂光といふ事がわからないで、穿き違ひをして宜い加減なごま化しを言うて居る、それは所謂

「鼠唧々となけども即の即たるを知らず」といつて娑婆即寂光と言つたつて即といふ字の意味がわからない。「即」と言へば必ずそこに「離」といふはなれたものがあるのである。即離の關係といつて、凡夫即佛といふ事でも、凡夫と佛の間には離れた所がある其の離れ方が非常にひどい、一方は煩惱の底に沈んで居る、一方は慈悲の光明に輝いて居るもので、お月樣と鼈よりモッと違つて居る、此の違つて居るものが本來違つて居るものではない、內面には佛性を有つて居つて尊い佛樣に一致する點があるといふので、凡夫即佛といつて引張つて來るのである、非常に違つたものを引つけて來る言葉である、凡夫その儘ならば凡夫即佛ではない、凡夫即凡夫、本來是れ凡夫ぢや。ところが今の法華宗の凡夫即佛論は、凡夫その儘まる出しぢや、凡夫即佛ぢやといつて凡夫へ戻つて來る。煩惱即菩提だから煩惱の本性をさらけ出せ、ナーニ構はないぢやないか、何をやつたつて煩惱即菩提ぢや、ヤレ〳〵ッと言つて鉢卷をしてやり出す、煩惱即菩提ぢやと言つてます〳〵煩惱を嫌んならしめる、凡夫即佛ぢやと言つて凡夫まる出しで、凡夫の方へ引つ張り込んでしまふ、これは實にえらい間違ひである。即といふのはそんな意味ぢやない、今も申す通り、例へば晦日の月は即十五夜の月と言つたならば、晦日の月は眞暗がりである、十五夜の月は眞丸く光つて居る、光に於て非常な違ひがあるからして、其の違ひのある所をば、表面からは見えなくても月の性は同じものだといふので、晦日の月は即十五夜の月と言ふのである、即といふ字が附いて居つたら其の現はれに於ては非常に違ふといふ事を知らんければいかぬ。娑婆即寂光に就ては、寂光淨土は非常な立派な淨土であるといふことを一つ知らなければいかぬ、それを少つとも知らない、まるでお御噺みたいな事になつて居る、だからして所謂心學道話で謂ふやうに「飯を食つて汁を吸うて寢たるところを極樂といふ」といふやうな事を言つて、飯を食つて汁を吸つて、鼾をかいて寢たところが極樂ぢやといふ、そんな極樂ならば豚でも犬でもみな極樂ぢや。あゝいふ下等な思想では、悟つたやうなわかつたやうな事を言うても何も宗教の意味がわからない、たゞ此の世の中で借金なしに娘でも大きくなつて花見に行つて酒でも飲んで、あゝ極樂ぢやといふやうな事で、それが宜いやうに思つて居るのはこれは心學道話的の話である。それは日本人は哲學思想が幼稚であつたが故に、そんな議論が迎へられたけれども、學問思想の發達したところでそんな事を言つて居ればそれは、野蠻人の思想として一も二もなく排斥せられてしまふものぢや。それが日蓮主義には割合に殘つて居る、そんなものは宗教ではない、娑婆即寂光でも、即身成佛でも、日蓮本佛でも、これは俗論の中から生れたものであつて、まことに憐れなる所の思想である、左樣な事は所謂「鼠唧々と鳴けども即の即たるを知らず」である、漢字にすると鼠の鳴き方を「唧々」と書く、日本では鼠はチュー〳〵鳴くといふから、チュー〳〵でも宜い、鼠チュー〳〵と鳴けども忠義の忠といふことは少しも知らない、それと同じ事ぢや。法華宗の坊さんが娑婆即寂光ぢや、即身成佛ぢやと言つたつて、それはたゞ即々といふきりで、何にも即の意味を知らない、無茶苦茶である、左樣な事では佛教の價値は滅びてしまふ。法華經が却つて世間の俗論を

助け成すやうなことになる。それであるから關事邊の日蓮主義のドンドコ法華といふものは、信仰が腐敗して居るのみではない、高い哲學をおさへ、宗教をおさへて日本の正統なる文化を賊せんとするものである、こんなものが蔓つて居る間は日本の文化は發達しない、そこを能く考へなければいかぬ。

それから日蓮聖人は、現世利益の事もよく言はれて居る、決して法華經は現世を捨てるものではないけれども、そこは非常に理想が淨いものである。又その現世利益の御祈禱といふものでも、別に本劍を振り廻したり、あんな事をするのではない。日蓮聖人の御祈禱といへば、房州に於てお母さんが沒なられた時に其の蘇生を祈られた、其の時分でもたゞ庭に降りてそこに三寶を勸請し、諸天善神の來臨影響を乞うて、さうして一心に祈られた、たゞ眞心を以てそこに筋立つた事を言うて居られる、そこに申立の正義といふものが無ければいかぬ。裁判でもやはりその通りで、何でも言うて來たら聽くといふことは甚だ間違つた話である、いきなり駈け込んで「頼みます〳〵私は今大變困つて居るからちよつと金を貸して貰いたい」といふやうな事を言つたつて、それが助けられる譯のものではない、そこに必ず申立の筋が無ければならぬ。日蓮聖人が母の蘇生を祈つた時分の申立といふものはちやんと筋が立つて居る、どういふ工合に言はれたかといへば、日蓮が平生家に居つて親の傍に孝行の出來る身であるならば、今まで親の傍に居つて給仕奉公をして居るから、人生の無常、母が死んだからといつて文句は申しませぬ決してお願もしませぬ、けれども日蓮は佛法の爲めに、年十二歳にして清澄山に登つてより以來、母の

お側で親しく給仕奉公することが出來ませぬ、又今日母が蘇つたからといつて、母の側にいつ迄も居る譯ではありませぬ、直ちに草鞋を穿いて鎌倉街頭に法華經傳道のために旅立つ身であります。母のお側に孝養の出來ないといふのは、一身の勝手で親に孝行をせないのではありませぬ、法華經のために、日本國のために、一切衆生のために微力を捧げたいので、大事の母を捨てゝ日蓮は法華經の方人となるのである。此の法華經の爲めに盡す日蓮をお考へ下されゝば、母をモウ一度蘇らして戴きたいといふ願は無理ではなからうと思ひますが如何ですか。斯ういふ意味合を以て祈られた、そこが如何にも筋立つて居つて宜しいと思ふ。法華經の爲めに盡す身であるから親に孝行が思ふやうに出來なかつた、折角會ひたいと思つて歸つて來たのであるから、どうぞ母をモウ一遍蘇らして貰ひたいと祈つた。諸天善神はその願に驚いて直ちに母の蘇生をお許しになつた譯である、それは現世の御利益といふものが立派にあらはれた譯である。けれども、今の法華宗のやうに、ヤー狐が憑いた、狸が憑いた、それは施餓鬼をしたら癒る、施餓鬼料は三十圓だ、イヤ物價騰貴だから五十圓だ……そんな事に現世利益の御祈禱を濫用するといふのは、これは愚民を誑かして錢を取るが爲めにやる事であつて、決して本當の御利益があるものではない。むやみに何が憑いたかにが憑いたといふやうな事を言つて、初めはお祖母さんの死靈が憑いて居る、それを攘つたら今度は又曾祖父さんの死靈が出て來た、何でも宜いからその度に施餓鬼をセイ、赤飯を炊け……さういふやうな事をやるのは全く人心を惑惑するものである。正しき信仰を

與へて現當二世を祈らすのは宜いけれども、祈禱の仲買人といふ者があつていろ〳〵胡麻化すといふことは、恐るべき罪惡である。斯ういふ事はモウ佛機の教から見て全然許されぬ事である、況んや法華宗は佛教の中の正義を以て立つものである、佛教の檢察官を以て任ずるところの法華宗が、自から左樣な迷信を鼓吹するといふ事のあるべきものではない。そんな事をやりたければ眞言へ行くとか、他へ行つてやつたら宜い、法華宗の各に於て左樣な曖昧な迷信をやるといふ事は許すべからざることである。これは何も吾輩が初めて言ふのではない、嘗つて冠鐍日親上人などもさかんにそれを論ぜられた、それを論じた爲めに腐れ坊主が讒言をして、あの通り日親上人は牢に入れられた、其の牢に入れるといふのも尋常の牢ではない、八疊敷ばかりの牢の中に三十二人も一緒に打込んだ、其の中には殺人とか强盜とか搔淡とかいふやうな惡者ばかりの中に日親上人を入れた、これはどうしても向ふの奴の方が强いでせう「コラ坊主、貴樣邪魔だ、隅の方へ寄つて居ろ」といふやうな譯で押込められる、押込められても八疊敷の内に三十人以上も居るのだから身動きも出來ない、牢内の苦しみと言つてもさういふ惡漢の中に投ぜられた苦しみといふものは又大變な事である、それを日親上人はやられて居る。それを賴みに行つたのは其の時の法華の坊主だ、日親をさういふ目に遭はしてしまはなければ自分が今申すやうな商賣が出來ない、營業妨害といふ事を以て讒言をしたのである。それは冠鐍日親上人の傳記をよく見て御覽なさい、上人みづから書いて居る中に其の事があらはれて居る、何も今私共が初めて言ふのではない。日親上人の御傳記は短かいものであるから、讀んで見たら直ぐわかる、上人みづから其の中に法華宗の迷信を攻擊して居られるのである。それは當然の事である、法華經の主義は迷信を許さぬのである。

その他日蓮聖人が現世の事に就て御利益のあるといふ事は御遺文にも書かれて居るけれども、皆正義を本にして居る、決して非道な事を顧つて宜いといふことはない。他宗に於ても祈れば多少の驗しはあるけれども、そんな僅かな驗しがあつたからと言つて、決してそれが正しいとは言へない、どこ迄も教はその法門と道理とに依らなければならぬ、法門といふのは佛法の中の教義である、道理は世間の道理である、道理を先とし、如來の聖教を先として教は立てゝ行かねばならぬ。たゞ祈つたら御利益があつた、御利益があつたら何も理窟が無くとも有難いといふやうな迷信に陷つてはいけない。何處までも法門と道理に依つて教を立てなければならぬとの主張であります。

大僧正本多日生貌下著
大慘害に當面せる國民の覺悟
一部定價金五錢郵稅金貳錢
百部割引金參圓五拾錢(郵稅共)
發行所　名古屋市東區田代町字城山常樂寺內
統一編輯局
(電東五四八七番)

國防上の急務

陸軍少將　細野辰雄

序論

歐州戰亂を一期と致しまして、各國何れも國民思想上に一大變化を來たしましたが、取りわけ我國民の思想に惡化の影響を受けた事は、諸君も御同感の事と存じます。

諸君、今日の現狀にして此儘押し進んで行くならば、我國が今日迄繼承して來た所の美點は遂には打ち壞はされ、思想上より我國は衰頽を來しはせぬか大に考へねばならぬ事と存じます。

從來國防と謂ふ事は動もすると極めて狹い意味に取り扱はれて居るのでありまして、國防上の責任は武力に委ぬべきものと考へられた傾向があつたのでありますけれども、私は先づ一般國民の斯うした狹い見解を打ち破らなければ、國防の實は決して擧らないことを力說したいのであります。即ち國防と謂ふ事は、外部より來る力が我國を脅威し、壓迫し、遂に國力を傷害せんとする場合には、其力の如何なる形を以て來るとも之を排除し、之を防止し、以て我國の永遠の安泰を計ると謂ふ事でなくては、眞の國防と謂ふわけに參らぬと思ひます。即ち餘程廣義の精神に依らなければならぬと思ひます。

先帝陛下の軍人に賜はつた御勅諭には「凡そ生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかるべき況して軍人たらんものは、此心の固からねば物の用に立ち得べしとも思はれず」と仰せられたのであります。故に軍人は唯だ武力のみにて國防の衝に當ればそれで宜しいなんどと、狹い考を持つだけでは、それこそ御勅諭の趣旨に副はぬのであります。現今我現役將校の中には、在鄕軍人が參政運動をなすなどは餘り面白い事でないと申して居るものも少なくない樣だが、是は從來軍人教育の上に國防に關する見解が、餘り狹義に失した餘弊と見て差支ないと思ひます。即ち國に報ゆると謂ふ事は武力ばかりではない、凡そ國家存立の上に害毒ありと認むるものは、國民は固より、國防の中堅を以て任すべき在鄕軍人に取りては、全力を擧げて是が排除防衛に努めなくてはならぬのであります。

然らば我國に對し、其存立上に害毒を流し、脅威を感せしむるものは何んであるかと申しますると、是を客觀的に見れば、外國より襲來する惡化思想、經濟的侵蝕、外交的壓迫、並に武力侵害等でありまして、是を主觀的に見れば、國民思想の墮落、殖產工業の不振、政治道德の腐敗、社會教育の不備、並に軍備の欠陷等であります。

一、思想問題

先づ外來の惡化思想とはどんなものか、是は諸君も御承知の通り、平等の思想より惡化したる共產主義と、自由の思想より惡化したる無政府主義であります。此共產主義は今日の不健全なる經濟組織を打破し、四民平等の恩惠に浴せんとする理想より出發したものでありますから、其考への基礎に就ては別段申分がない、寧ろ左樣になれば人類が平等に生存

する事が出來て、至極結構な事と思ひますが、事實の上から是を見たならば、是は一片の空想でありまして、神樣は左樣に都合よく人間を御造りになつてをらぬのであります。どんな人間でも慾望を持たぬものはない、而も其慾望は無限に擴大せんとする力を持つて居りますから、一面に於ては共存共榮を欲すると同時に、一面には生存競爭の向上力を棄つる事が出來ないのみならず、智情意の三つの働きが、人によりて頗る不平等に與へられて居るのですから、如何に平等を强いても其平等は一瞬時にして破壞せられて什舞ふのであります。例令ば個人の私有財産を認めぬ事とし、總てを國有とし、又は團體所有として、毎日〳〵平等の分配をなすとしても、成人は米五合を貰つても尙ほ足らぬものもあれば、五合貰つても三合でよい人もある。三合でよい人は毎日二合宛剩して行くから、數月の後或は數年の後には多量の米の所有者となり、五合で足らぬ人はいつもひもじい思をして尙ほ少しの所有もないので、直ちに平等は破壞せらるゝ事となります。是が金錢の支給の上より見れば更に一層明瞭の結果を顯はすのであります。それのみならず能力のあるものも、愚鈍なものも、働くものも、怠けるものも、同じ分配を受くると謂ふ事になれば、能力あるものは能力の出しおしみとなり、働くものは成るべく働かぬ樣になるから、進歩も發達もなくなりて、だん〳〵退歩衰頽に傾く事は理の當然でありまして、是は勞農露國の革命に依りて實實上に爭はれぬ實證を示して居るではありませんか。然るに是が巧妙なる宣傳に誤られて、我國にも共產主義によりて經濟組織の改造を叫ぶものが出來たのであります。經濟組織の改善は斯樣な淺薄な、而も破壞的の方法では出來るものでない。寧ろ勞働者は働ける丈け働き、資本家並に經營者は經濟的手腕を伸ばせる丈け伸し、而して其利得の分配の上に就ては大に注意を拂へばよいのである。資本家は勞働者をいつ迄も勞働者として使用する考を抛ち、彼等に勞金の一部をば必ず蓄積すべく指導し、又蓄積出來る丈けの分配をなし、其蓄財が經令零碎であつても是を多く集めて資本に充當する途を開けば宜しいのである。資本は少數の資本家の壟斷すべきものでない、總て如何なる事業も事業に關係する勞働者、資本家兩方面の資本に依るやうにしたならば、何も共產主義者の稱ふるやうな破壞的手段に出でなくてもよいと思ふ。又此平等の思想から惡化して階級打破の觀念を高め、是よりして國家社會の秩序を破壞せんとするのであります。國家や團體には秩序がなくては全く其運轉を阻害する事となり、國家として又團體としての働きが全く出來なくなるのである。平等觀も今日の樣に極端なる方面に濟ぎ出しては、我國傳來の穩健なる思想を破壞し、共存共榮相互扶助の上に最も大切なる犧牲的觀念と、利他的行爲がなくなるのであります。まして忠君愛國の信念を以て國民道德の中心として敎養せられた我大和民族の唯一の美點は、是が爲全く破壞せらるゝ恐れがありますから、外來思潮として我國に襲來する此等平等觀より出發する惡思想に對しては、國民擧つて是が防衛擊退に努めなくてはならぬ、是が思想的國防の大切なる問題である。殊に在鄕軍人としては、其敎養せられたる犧牲的精神を發揮し、國民の中堅となりて是が擊退に努めなくてはならぬのである。

又自由思想より惡化したる無政府主義の如きは實に言語同斷のもので、人類が孤立無援の境地より進んで長短相補ひ、有無相濟する所の團體的訓練を重ね、以て生存上の保障を築き上げた、祖先以來繼承し來つた幾多の勞力と、功積をば一朝に破壞せんとするものでありまして、現に彼等無政府主義者は、彼等祖先以來の努力に依り築かれたる社會に在て、生存上の保障を受けつゝある事に氣附かずして、總て是を當然の歸結と即斷し、其上に個性の氣儘勝手を增長せしめんとする慢放埒の思想に過ぎないのであつて　我國體とは全く相容れぬ恐るべき思想である。殊に自由思想より出發したる自由戀愛思想の如き、滔々として我國内に侵入し來つた結果、幾多の有島事件を生じ、幾多の武者小路事件を頻發して居るではありませんか。斯の如き事件は微細の方面より種々と理窟を捏ね廻すものも澤山ありますが、なんと辨解しても人倫道德の破壞と謂ふ決論に到達せずには居れぬ事と思ふ。戀愛至上主義とか、自由戀愛主義とか、種々の「ハイカラ」な新語を用ひても要するに姦通である。姦通に到達する徑路は各異なつて居り、其心情の上に相當の理由を附しても、其理由は自由思想の曲解より導かれて來るのでありまして、何れに致しましても外國より襲來する此極端なる自由思想は、我國體を破壞し、我が國民思想を墮落せしむる事を思はゞ、國民擧つて是が驅逐に努力せなくてはならぬ所の、思想的國防上重大な問題である。殊に質實剛健の氣風を「モットー」として立つ在鄕軍人に於ては、進んで是が驅逐膺懲に努めねばならぬのである。

驕つて我國の現狀を見ますれば、單に有島事件や武者小路事件ばかりでない、國民思想の傾向は外來思潮の惡影響を受けて、漸次惡化墮落の狀勢に進みつゝある樣でありまして、滔々として利巳主義の旺盛を極めつゝある實は爭はれぬ事實である。此利巳主義が、經濟組織の上には勞働騷議となり、或は小作騷動となりて顯れ、又は或意義に於て物價騰貴の一因をなして居るのである。是が政治上には政黨政派の墮落となり、政治の腐敗となり、良民を苦め、國勢の衰頽を釀さんとしつゝあるのである。是が思想問題の上には、共產主義の共鳴となり、無政府主義の迎合となり易き、恐るべき禍根を藏するのである。是が性の問題の上には自然主義となり、享樂主義となり、野性戀愛に墮落の因をなすのである。古來聖賢が身を賭して叫んだものは利己的觀念の抑制であつた。釋迦も、孔子も、耶蘇も、ソクラテスも慈悲を說き、仁義を說き、愛を說き、正義を說いたのは、皆な人生が貪慾よりの執着を脫し、廣く利他的觀念の上に立たなくては、人類の幸福を導く所以でない事を力說したのである。然るに今日我國の學者を以て任じ、識者を以て誇る人々の中には、日本固有の道德並に思想の根本に就て深く研究する事をせず、又是が長所を世界各國に宣傳する事にも努めず、直ちに西洋の物質文明の研究に沒頭し、一も二もなく西洋の新しいものが結構だと云ふ有樣で、世界文化の上に最も有効と認むべき、日本固有の道德觀念を疎外せんとする傾向になつて居るものが少なくない。世界の平和を求めんとするには軍備の制限や、殺人器械の抑制位では、單に枝葉に囚はれたる淺見者の幻夢であつて、寧ろ其根本に立ち入り、日本固有の道德觀念を鼓吹し、以て精神的方面より平

和の基礎を築き上ぐる爲め、利巳的觀念に立脚したる總ての問題を排斥するのが今日の急務ではなからうか。

個人として利巳主義の增長が最も社會人道の上に惡影響を及ぼす事は申す迄もない事でありますが、是が團體の上にも、國家相互の間に於ても、利巳的精神の上に立脚したるものは、必ず相互の間に爭鬪を惹き起さなくては已まぬのでありまして、軍國主義とか、侵略主義とか謂ふものは、皆な國家としての利巳的觀念より來るものであります。故に軍國主義や侵略主義が惡いと同じく、經濟的侵略、思想的侵略、外交的侵略も、一層其の陰險なる點に於て宜しくないのである。要は利巳的立場にある間は、其處に平和の攪亂が伴ふことは必然の道程にあるものと見て差支なからう。此大切な問題が解決せない

間は、百の華盛頓會議が開かれても、國民は枕を高うする事は出來ないではないか。然るに世人は今何と謂ふて居りますか、軍國主義が惡い、侵略主義は絶對排斥せねばならぬと、盛んに宣傳して居るに係らず、西方勞農露國よりは盛んに過激思想の宣傳をなし、北滿を犯し、朝鮮人を煽動し今や我國内にも侵入して來て居るのである。然るに思想に國境なし思想の研究は自由なりなど申して、思想的國防の急務を殆んど忘れて居る樣だ。彼等は先づ理智的考察を遂ぐる前に、多くの淺識なるものは直ちに心酔に陷る事を知らないであらうか。狡猾なる外人は日本の武力が強いと見れば、日本を弱くする爲めには日本は軍國主義だと宣傳すれば、我國上下の官民一同擧つて恐怖の念に打れ、軍國主義を排せよと彼等のお先棒となつて宣傳に努むる計りで、彼等は夫れよ

りも尙ほ恐るべき惡思想の侵略を氣儘勝手に振り廻しても、一言半句の文句もなく、却て思想に國境なしなど、太平樂を唄ふて居る程お芽出度くなつて居る。又東方米國は常に正義人道、自由平等を主張し歐州大戰の紛亂に乘じ債務國が一躍債權國となり、數百億の金權を握り、是に依て天下の覇權を掌握せんと、やつ氣になつて居るのである。米國の正義人道は、唯だ白色人種間に限られた正義人道で、自由平等も有色人種を圈外に置いた自由平等であり、而も其口にする世界の平和は、唯だ米國だけの平和に限られて、他の列國を脅威しても構はぬと謂ふ隨分亂暴なやり方をなして居るではないか。殊に其强大なる金權を振りかざして、東洋方面の經濟的侵略を平氣でやつて居る。而も是に對し我國民上下を通じて、全く無關心の有樣である、何たる情けない事であらうか。諸君我々はどこまでも利巳的立場を離れて、武士道的精神を發揮し、忠君愛國の結晶力に依りて、正々堂々と進む路を取らねばなりません。西洋思想の誤りたる出發點にかぶれ、利巳振他の觀念に襲はれてはなりません。我が武力にかなはぬと知つた某々國の策士等は、軍備制限の美名の許に、我武力の形の上には制限を加へたけれども、我が精神的の威力の上には制限を加ふることが出來ません。茲に於てか思想戰に於て日本を攻め立てんと、畫策怠らないのである。然るにそんな事には少しも氣附かずして、我國民の大部は依然ぼんやりして、唯だ目前の小さな利巳的觀念にのみ沒頭して居る樣では遂には我々祖先に對し申譯のない樣な事に立到りはせぬか。國民一同が大に覺醒せなくてはならぬ重大時期に當面して居る事を、一日も早く氣附かなくて

はならぬ事と思ふ。

今日思想問題に就て最も憂ふべき事は、外來思潮の惡化が固より其因をなしては居りませうが、前申しました通り我國民思想が著しく利己的觀念に囚はれて來た事と、更に利己主義に根を挿した不平が驚くべき力を以て頭を擡げつゝあることである。勞働問題や、小作騷議の煽動者は、多くは利己的立場から彼等の社會的境遇に不平を抱き、手段方法を撰ばず、冷靜を缺いた暴舉に依り、自己の賣名の爲にせんとするものである樣だ。又官吏、學者、政治家、實業家乃至は青年輩の中にも、其社會的境遇上の不平より、一種の革命を希望して居るものが少なくない樣だ。斯の如く利己に囚はれ、或は不平に呪はれたる輩は、一の爆藥の樣なもので、是に外來惡思潮の强烈なる點火をなす場合には、一時に爆發の災害を見る事となり、最も國家の爲め恐るべき禍亂を惹き起すのであつて、國民一同は大なる注意を拂はなくてはならぬ重大問題である。故に思想問題の最も恐るべきは此點にあるので、彼の佛國の大革命を見ても、獨逸猶太哲學者メンデルス、ゾーンの思想が佛國に大流行を極めた結果、革命の勃發となり、近來露國の大革命も、獨逸猶太カール、マルクスの共產思想の流行に乘じ、レーニン、トロツキーの點火に依つて、國內一時に爆發の災害に遭つたのである。獨逸の戰敗も、國內に左傾社會主義者の潛勢力漸次擴大の結果スパルタカス陰謀團の蠢頭に依り、國內より戰鬪の中止を餘儀なくせられたと謂ふて居る。斯の如く外來の惡思想は最も恐るべきものでありますが、國民の頭が利己的となり、不平分子が增すと謂ふ事が、第一恐るべき禍根をなすので

ありますから、國民指導の衝に當る爲政者は、公平無私にして、正義を以て民を導き、苟くも利を以て民を誘ふてはならぬ。然るに政黨の墮落は徒らに黨政の擴張に沒頭し、利權の提供に依りて頭數の增加を計るに汲々として居る有樣でありまして、國民も自己の利益になる事なれば理非曲直を考ふる暇もなく、利權提供の甘言に風靡せられて、國家の利害や思想の惡化に何等頓著せず、甘きに集まる蟻の樣な有樣で、政黨の墮落を益々增長せしめて居る現況である。斯の如くして如何に政黨が多數を占めた所で是は利を以て民を誘ふ惡政をなすものでありまして國民思想を益々惡化し、利己的觀念の增長を國民に普及せしむる事となり、國內に恐るべき爆藥の撒布に努めて居ると申しても宜しいのである。國民の氣風が上下擧つて利己的觀念に依て動く餘弊は、金權萬能の風習を形造る事となりまして、無產階級の不平は必然的に勃發するのである。故に思想問題は外來の惡思潮に對して、充分警戒をせなくてはなりませんが、內部よりも政治的改善の實を擧げない以上は、思想善導の上に何等の効果がないのであります。固より社會教育の完備とか、健全なる宗教的信念の確立とか、種々の補助手段も必要でありますが、先づ爲政者の態度から改めなくてはならぬ。故に思想問題に關聯し最も大切なるものは、政治の改善でありまして、在鄕軍人が國防の中堅として自ら任ずる以上は、思想的國防の上より見ても大に政治的に覺醒して、目下の惡弊を除去する事に勞力せなくてはならぬ。是れ則ち平時に於ける在鄕軍人として先帝陛下の御勅諭にも御示しになつてをる國に醇ゆるの第一義ではなからうか。故に現役軍人に於ては

政治運動には絶對關係すべきものでないにしても、其教育する兵卒は現役を離るれば直ちに鄕里に歸り忠良なる臣民として大に國家の爲めに働かなくてはならぬ。則ち廣義の國防の中堅として任せなくてはならないものに、在鄕軍人の參政運動は宜しくない、と謂ふ樣な狹い考を以て現役將校の頭を硬化してはならぬ。苟くも將校たるものは、善良なる政治の要諦位は在鄕間の心得として、兵卒に教育する必要があるのである。如何に軍隊内にて軍人精神の養成を說いても、犧牲的精神の向上を話しても、足一たび營門外に出で、在鄕軍人として濁せる社會に立つ場合に、何一つ是に對する用意を與へない樣な軍隊教育は、何の役にも立つものでない。私は軍隊教育者が今少しく眼界を廣くし、今一層有益なる軍隊教育をなす事を切に望んで已まない者である。固より忠君愛國の精神は日本獨特の文化の華として見るべきもので、軍隊教育に於ては、此點に就ては他の如何なる教育機關よりも此較的優良なる教育を與へて居る事を信じて疑はないのでありますが、此精神を裏切り、且つ破壞する所のものは、外來の惡思潮と社會に滔々として流るゝ利己的觀念、不平的言動である以上は、是等に對する態度と用意に就ても周到なる注意を與ふべきである。殊に是が禍根をなす政治の腐敗を改善する點に就ては、充分綿密なる教育が必要であると思ふ。

獨逸のカイゼルは嘗て謂つた事がある。「日本ノ文化トシテ、大和魂ハ其ノ愛國的道德的觀念ニ於テ誠ニ立派ナモノダガ、此精神ハ單ニ傳統的ノモノダカラ、未ダ思想ノ戰爭ニ依リ鍛錬セラレテ居ラヌ。故ニ將來各種ノ思想ノ襲來ニ遭フテ動搖ヲ來タシハセヌカ、大ナル疑問デアル」と謂ふて居る、大に傾聽に値ひするものと思ふ。又アインスタインが昨年秋日本に來る途中上海に立寄つた際、我新聞通信員の日本に關する感想如何との問に對し「日本ノ文化ガ歐洲ノ影響ヲ受ケズ、獨立シテ發達シテ居ルコトハ特ニ私ガ愉快ニ思フ所デアル」と謂ふて居る。アインスタインは、日本の現狀は未だ見ないながらも、日本人は忠君愛國の思想に富んで居る事は知つて居つたのに相違ない。故に此の精神的文化の最も崇高なるものが、歐米諸國を風靡しつゝある惡思想の爲めに影響を蒙らずに、獨立で發達して居る事と思ひ實に愉快であると述べたのである。然るに彼は日本に來り、各地を遊歷し、我國内の事情の一端だけは視察を遂げた後に、歸國の途次大阪に立寄りまして官民の歡迎會席上にて一場の演說をなした中に、

「貴國ニ參リマシテ各方面ヲ見セテ頂キマシタガ、其近代的進步ノ外ニ、更ニ日本獨特ノ美點アル事ニ感心シマシタ。ドウゾ是レガ西洋文化ノ移殖ト共ニ損ハレズニキルコトヲ望ミマス」と述べて居る。是は日本は西洋の物質的文化の輸入に依り、近代的進步を遂げて居るが、是と同時に滿々として襲來する外來思潮の爲に、日本獨得の美點、即ち忠君愛國の犧牲的精神が尙ほ損はれずに居る樣だけれども、どうもだん〳〵と其れが損はれつゝある樣だから、此點に充分御氣を附けなさいと謂ふ意味を、至極圓滑に言外に云ひ顯はしたものと私は思ひます。此カイゼルの言と謂ひ、アインスタインの警告と謂ひ、共に現今の輕薄なる學者や、淺見なる青年輩が、動もすれば思想に國境なしとか、研究は自由なりとか叫んで、唯だ新奇を追ふ事に汲々とし、放慢不羈の態

度を取るものには、確かに頂門の一針とでも申すべきか。我々は決して放慢なる宣傳に迷ふてはならぬ殊に思想的國防と謂ふ點に就ては大に覺醒せなくてはならぬ事と思ふ。之が思想上國防の急務ではなからうか。

若い馬鹿女へ

なぜ、若い多くの女は、彼等の虚榮で、平和な人生を蠶毒し、惑亂し、破壞せんとするのか。何の特權で彼等は贅澤な服裝をするのか。

關東幾百萬の同胞は、家を焼かれ、産を失ひ、一家離散して、此の寒空に温かい着物を有たないのだ。

よし新調せずとも、華美な服裝で、仲間の馬鹿女の虚榮心を刺戟してはいけない。

自ら生産しない女が、無暗に服裝の爲に浪費するのは罪惡だ。

なぜ彼等は、その贅沢な美裝に包む事にのみ虚榮の生活を捨よ。

東京には近頃白粉の女がチラホラする、鉛しそれは肉を賣る女の群だ。

虚榮の若い女達よ、君達は美裝して若い男に高價く買はれたいのか。

反省せよ、覺醒せよ、我日本國は、君達馬鹿な女の爲に、その復興を妨げられては困るのだ。

復興の日本には
凡ての女が、
「綿服と、徒歩と、勞務よ」

大法鼓經講義

（承前）

本多日生

迦葉、佛に白して言さく、世尊よ、若し一切衆生に如來藏ありて一性一乘ならば、如來は何が故に三乘の聲聞乘、緣覺乘、佛乘有りと說きたまふや。佛、迦葉に告げたまはく、一乘を樂はざる者には爲に三乘を說く、所以は何かん、此は是れ如來の善巧方便なり、是の諸の聲聞は悉く是れ我が子なり、除糞の者の如きは今始めて自ら知らん。迦葉、佛に白して言さく、嗚呼異なる哉是の聲聞乘は何ぞ鄙きの甚しきや、實に是れ佛子にして而も父を識らざるなり。

この一段は、三乘に說き分けたのは方便であることを明し、更に佛性を信解しない者、隨つて佛子の自覺を有せざる者は卑しむべきものであることを誡めたのである。

要文を解釋すれば、迦葉が申すに、今お話の通りに、若し一切衆生に悉く如來藏が具はつて居る同一の佛性であると云ふことであるならば、その同じものを敎へ導くに幾つも敎を立てる必要はない、如來の敎は同じ一佛乘であつて然るべきである。それ

に何ぞ三乘の聲聞の爲の敎、緣覺の爲の敎、佛になる者の爲の敎と云ふ風に分けて說かれたのであるか。佛告げて言はれるには、一佛乘を樂ふ人であるならば三乘は說かなくても宜ひのである、所がそれを樂はざるものがある、矢張小さき敎へより繫がりを取らなければ進み得ない者があるから、その者の爲に三乘を說いたのである。之を說くのは衆生を誘導攝化する善巧方便に過ぎないのである。この「如來の善巧方便なり」と云ふ善巧方便と云ふ事を適當に領解しなければならぬ。善巧と云ふは文字の通りに、道德的の意味であつて、善意から出てさうしてそれが頗る適當なる方法である。巧と云ふのは、それが最も良く適合することである。唯まあ〳〵あゝ云ふものは仕方がないから存して置くと云ふのではない善と云ふ所に最善を盡す意味がある、巧と云ふ所に最も能く適當して居る意味があるのである。さうしてそれだけの効果を現して來るから方便と云ふのでこの方便と云ふは譯語で、向ふに當てがつてそれを導くので、而かもそれが眞實に入つて來る所に意味がある。それは何事でもさう云ふことがある、音樂を稽古するにも、始めにはブウ〳〵音をさして居るやうであるけれども、その中に現れて居る音が後に微妙なる音樂を奏する時に役立つのである。三昧線の一二三の線が彈き分けることが出來れば如何なる巧妙なものも彈けるのである。勝手に始めをやらして居るやうであるけれども、その音の中に微妙なる音樂が發生して行く、それは方便である。併ながら唯ブウ〳〵やらして居つたら宜いと云ふのではないそれが調節されて微妙なる音樂になつて行かなければならぬ、そこに方便と眞實と云ふことがある。さう云ふ意味に於て三乘を說くのである。それで眞實を語るならば、元來諸の聲聞の人等も悉く是れ佛の愛子であつて、聲聞と云つて別なものではない。矢張佛性を有して居つて、如來の悟りを繼ぐ所のものである。

然るに彼の法華經の信解品に詳しく說かれて居る長者窮子の譬のやうに、窮子は除糞に滿足して汚い物を扱つて一日の賃錢を、今日は七十錢貰つた八十錢貰つたと言つて滿足して居つたが、そこの家の財產全部が自分の有であることを知らぬ、却つてその家を讓らんとすれば、驚いて惱求する所がなかつた。けれどもその迷ひが醒むれば長者子であると云ふことを自覺したやうに、彼等も佛子の自覺に入つたであらうと仰せられた。その時に迦葉が申すには「嗚呼異なる哉」實に不思議なことで、餘りに馬鹿氣て居る。乞食を三十年も四十年もして、親が言ひ聞かしても、いや私は乞食ですと言つて居つたのは實に馬鹿氣きつた事であるから、そこで嗚呼異なる哉と云ふのである。一と通りの間違ひではない、隨分念の入つた間違である。佛性のあることを信解せず、又佛子の自覺に進み得ないならば、事實佛の愛子でありながら、自ら父を識らないで東西に食を乞ふ乞食と同じで、如何にも憐れむべく愚な者であると說かれたのである。

この一段の經文は如何にも大切で、殊に「實に是れ佛子にして而も父を識らざるなり」の一句は、是は佛敎徒の忘るべからざる所である。起信論をやつたとか、般若經をやつたとか、禪家の公案をやつたとか言つても、彼等は父を識らないのである。然るにこの經文にあるが如くに「何ぞ鄙しきの甚しきや」

彼等は識見が高い所ではない、馬鹿者の隊長である、釋迦の教を稽古しながら釋迦を罵るやうなことを言つて居る、佛性論は佛子の自覺に進む者の順序である、この事は私は聲を嗄して言つて居る。佛性論に就ては理の物性論、即ち潜在的の佛性論、行佛性は顯動的の佛性、即ち佛子の自覺から進んで菩薩行に入り、更に如來の證りに入る。理佛性、行佛性、佛子の自覺、菩薩行、如來の證りと云ふ順序を行法の上に於て私は力説して居るのである。故にこの句に就ては自分は非常に感激するのである。而して此等は宗派の議論ではなく、何宗に於ても之を知らなければならぬ。百年佛典を講じたからと云つても、この佛子の自覺なくしては、彼等は如何に傲慢であつても、いつかは醒めんければならぬことである。

復次に迦葉よ、如し士夫有つて大曠野を度り、合群の鳥鳴を聞く、時に彼の士夫是の鳥聲を思ひ、謂へらく劫賊有りと、異道より而も去り、空澤の中に入りて虎狼の處に至り、虎の爲に食はる。是の如く迦葉よ、彼の當來世の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、有我、無我の聲に於て、有我の聲を畏れ、大空斷見に入つて無我を修習し、是の如き如來藏、諸佛常住の甚深の經典に於て、信樂を生ぜず。

この一段は、如何にも痛快なので、譬に寄せて無我の病見を破し、實相觀の上に絶對の有我を説き、諸佛の常住人格の實在を説いて、それを信樂しない者は眞佛子にあらずと説いてある。

要文の意味は、佛が迦葉に告げて仰せられるには今譬を以て、無我に四はれ有我を嫌つて、佛教は無我だ、無相だと云ふ者の非を説かば、こゝに一人の侍があつて、それが曠い野原を旅行して居つた、所が群がれる多くの鳥がガヤ〳〵鳴いて居るのを聞いて、その侍は臆病な奴で、あの聲は何であらうかはゝアあの林の中に追剝が居るな、この道を進んで行つたならば、ひどい目に遭はされると思つて、恐れを懷いて異つた道から逃れ去らうとして、道に迷つて間誤々々して居るうちに日が暮れて、虎の居る處へ迷ひ込んで行つて、終に虎の爲に食はれてしまつた。後の世に於て佛教を奉する人達が、有我無我と云ふ事に就て議論の盛んなるに驚いて、是はどうも面倒な問題である。佛教は無我であると速斷して本來無一物だとか、無念無想だとか、無門關だとか、そんな事ばかりが眞理であると考へ、それが爲にこの大法鼓經に説くが如き、一切衆生に如來藏ありと云つて、四つの譬で説明したやうな事、それから、隨つて諸佛は常住であり、佛性も佛陀も實在である事、是は法華經に於て言へば、二乘作佛と久遠實成である。この佛性論と本佛觀とを忘れて、無一物だ無我だと言つて居るのは、恰度卑怯な侍が異つた道の方に這入つて行つて虎に食はれたと同じ事であつて、有我の聲を畏れて斷見の空澤に陷る。「斷見」と云ふは、魂も佛もない無佛無靈魂、虛無である、所謂唯物觀であつて、今の過激派の思想の如きが斷見である。現在だけが勝負だと云ふやうな思想に陷つて、この深い經典の有我の義に對して信樂の心を生じないと云ふのである。佛教徒は經旨を熟思して深く恐懼戒慎すべきである。

佛、迦葉に告げたまはく、汝且つ魔を求めよ、若し能く得れば法を護るに堪任せん。

この惡魔を觀よ、異方より來れり、諸の菩薩の如く、比丘の像を作して衆中に於て坐す、大衆悉く見るに五繫せらる、魔、童子に言ふ、我れ此の經に於て復礙げを作さずと、是の如く三たび說く。

この一段は正法を護るに就て注意すべき事柄を說いたので、それは自分が熱心に法を護ると云ふだけでは足らぬ、正法を妨害する反對者に對して之を挫かなければならぬ。例へば國家を大切に思ふと云ふだけではいかぬ、その國家を侵害するものがあれば之を擊退して、始めて憂國の實が擧るのである。佛敎を護るに就ても、唯だ護つて居るとか、信心して居ると云ふだけではいけない、之を毀損する者に對して備へる所がなければならぬ。日蓮聖人が折伏の活動を起されたのも、正法を毀損するものを擊退する運動であつたのである。この文は即ち折伏の精神を敎へて居るのである。

要文を解釋すれば、佛が迦葉に言はれるには、汝が護法の務めを全ふせんとするならば、自ら護法の道念を勵むばかりでは事が足らぬ。更に正法の妨げをなす惡魔が何處に居るか、それを求めて之に備へなければならぬ。この惡魔の本体は、普通の人の考へるやうに、恐い顏をして居るものばかりではない妻の如何を問ふのではない。その妻は僧侶であらうが信者であらうが、正法を妨害するものは若惡魔で

ある、何者が正法の發揚を妨げるか、それを求めなければならぬ、さうして之に備へるのである、若し能く求め得たならば法を護るに堪へたりと言ひ得るのである。

こゝに摘出はしないが、この間に面白い經文があるので、惡魔に關して色々說いてあるのである。その意味合を紹介するならば、先づ迦葉が天眼を以て惡魔を看出さうとしたが、何處に惡魔が居るか一向看出し得ない。それで失望落膽した有樣は、恰度探偵が犯罪者を逮捕せんとして、朝も暗いうちに起きて、飯も食はずに探し廻つたけれども、日暮れに及んでも尙發見し得ないで、失望して歸つて來るやうに、佛陀の敎訓を重んじて、迦葉が熱心に正法の妨害者を尋ね廻つたけれども發見し得ないでシホ〳〵として歸つて來る光景が、世人が可愛い息子が迷ひ子になつたので、何處へ行つたかと尋ね廻つたが、看出し得ないで、疲れてトボ〳〵と歸つて來るやうな有樣であつた。所がそれは迦葉ばかりでない、他の弟子達も同じ樣に、魔を求めたけれども看出し得なかつた。その時に釋迦牟尼佛が離車童子に惡魔を縛せしめられた。離車と云ふのは梵語で譯すれば大名と云ふやうな意味である。佛敎信者であるが是は坊主ではない、王樣の子であるから、惡魔を發見する方の力を有つて居た。その離車童子に「お前は惡魔を知つて居るから縛れ」と命ぜられたのである。所が他の人は數日尋ねあぐんだにも拘らず離車童子に命ぜるらゝと、直に惡魔を發見した、さうして一同に示したのを見ると、外から來たのでもなく、又恐い顏をして居る者でもない、その惡魔は僧侶の妻をして大勢の中に入つて居つたので、是だ是だと言

はれたのを見れば、紫の衣を着て居ると云ふ次第である。離車童子が縛らなかつた時には、一向他の佛弟子と違はないやうな顔をして、平然として居つたが、あれが惡魔であつたのか、この間中から來て、時々變な事を言つて居つたが、彼奴であつたのかとびつくりする始末。大衆の視線がそこに集まつて見ると、本繩に縛り上げられて居る、五體を縛せられて、大僧正と云ふやうな人が顔を眞ッ赤にして居るのである。こゝに惡魔は看破せられた爲に降伏して離車童子に向つて誓を立てた、私は邪念に驅られて居つたが、今は全く改心しました、今後善心に立戻つて正法を護ることに盡します、この立派なお經に對しては妨げを致さないと云ふ事を三度宣べたのである。この終りの所はこの經文に揭げてあるので、縛り上げるまでの一段が略してあるのである。

「この惡魔を觀よ、異方より來れり、諸の菩薩の如く比丘の像を作して衆中に於て坐す」何處から來たものか分らぬけれども、菩薩の姿をしてそこに居つたと云ふ、この經文は何を意味して居るかと云ふことを今日に於て考へて見たいと思ふ。吾々が正法の爲に盡すと云ふに就ては、唯だ自分が信心をして正法を宣傳するばかりではいかぬ、妨害者を看出して行く、是は一寸看破し難いけれども、併しその人を得れば出來るのである、必ずしも偉い人でなければならぬことはない。探偵になるには大博士を要しない、蛇の道は蛇であるから、その人を得て之を看破し、之を降伏せしめなければならぬ、それでなければ正法は發揚し得ない。國運を發揚するには學者や政治家や軍人ばかりではない、宗教家の如きは國運を發揚するに就ては大なる働を爲し得るのである、併しそれには今日のやうな軟弱なことでは駄目である、佛教徒も今迄のやうに無氣力でビク〳〵やつて居つてはいかぬ、正法と國家を擁護する爲には、妨害者を除くと云ふ事に力を盡さなければならぬ。私はこの護法と云ふ事を、斯う云ふ積極的の活動に移して見て行くが宜いと思ふ。眞逆にマホメットのやうに、劍を持つて起つとまでは言はぬけれども、今の日本の佛教徒のやうな態度は、是は決して釋尊の本旨ではない、釋尊の眞精神は決して日本の現在の佛教徒の考へる如き軟弱なるものでないことは明かである。今日の坊さんでは、到底釋尊のなさつたやうな大事は出來ない、日蓮聖人の爲さつた剛健な事が佛教の正統である、日蓮聖人に依つて陰氣な佛教が陽氣になつたのではない、佛教は固より陽氣なものである。支那に於てこんなものにしてしまつたが釋尊の出られた當時に於ける、その意氣は非常に旺盛なものであつたのである。

佛、迦葉に告げたまはく、菩薩摩訶薩八功德を成就せば、能く現前に如來の常不壞の法身を見ん。

この一節は、功德が積まれたならば、佛教徒の希望して居る所の如來が存在するとかせぬとか云ふことは議論でなくして、常住不壞、人格實在のその法身を現前に見たてまつることが出來ると說かれて居るのである。法華經に於て力說するのも、正しくこの色身の常住、人格の實在と云ふ事であつて、法華の信者である以上は、完全なる如來に向つて渴仰を捧げ、如來の常住不壞の法身を見ると云ふことが信仰の大切なる所である。

こゝに擧げられて居る八つの功德とは、(一)この深いお經を說くに心に懈怠を生せざること。(二)又三乘の敎を說いても矢張懈怠をしないこと、三乘の敎を與へられたる意味を諒解して、深い方のお經も淺い方のお經も、佛陀の精神に基いて能〳〵運用する。(三)化すべきものは如何なる者でも之を捨てない、飽までも濟度の熱心を以て行く。(四)若し喧嘩して居るものがあればそれを和合して統一的にやつて行く、今の日蓮門下が分立して居ると云ふやうなことはいけない。(五)比丘尼女人黃門に親近せず、さう云ふ猥らなことを言はぬ。(六)權力ある者に親しんで自分の精神的の力に依つて努力しないと云ふやうな精神は離れる。(七)常に心が騷がないで禪定に置く。(八)不淨無我を思惟し觀察する。以上の八功德を成就すると云ふのであるが、こゝに云ふ不淨無我と云ふも、自分の劣欲を制して執著を離れ、煩惱の迷ひを醒すのであつて、それが結論でないことは屢々言つた通りである。無我と云へばどこがみじめだか分らないではいけない、どんな病氣でも葛根湯一點張りと云ふことでは駄目である。所謂禪學の如きものはこの低劣なる思想の產物である、如何に偉らさうな顏をして居つても、それが偉いと思ふのは駄目である、價値なきものはどこまでも價値はないのである。其等にこの大法鼓經是れ一つを見てもその誤りなることが明白になるのである。是で大法鼓經の講述を終ります。(終)

關東地方大震災大火災

突如、恐ろしい地震が襲來した、續いて大火災が起つた、記憶せよ大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十五秒、東京の大半と、橫濱小田原の兩市は全く焦土と化し去り、四十萬の家を燒き、十數萬の生靈を犧牲とした。東洋文化の誇りであつた大東京は、僅に三分間にして根底より破壞し去られ、表ゞ轉りの近代思潮は遺憾なくその缺陷を曝露した。大破壞後の民衆は如何なる思想の方向を辿りしか、殊に天災に乘じて暗に活躍した魔の手の加りて、破壞は十倍二十倍せられ、自然の暴力に脅かされて、流言蜚語に惑なる民衆は右往左往に暴擧を失し、或は甘粕事件となり、自警團の暴行となりて、結んで第二第三の災厄は日本國の前途に漆黑の闇を投げて居るのだ。

昔、六百五十年の昔、偉聖日蓮が立正安國の眞言は、今大正十二年に再現せられ、「我れ日本の柱とならん」との使命は、本多親下を統領とせる我統一國同人の双肩に懸つた。大混亂の帝都の巷に立ちて苦人の目覺しき奮闘を見よ。

腥風に玄題旗靡かせて
死屍壘々の中に如來の大慈悲を

如何に秩序を恢復し、如何に幾百萬の燒出された生すべきか、一切の努力はそれであつた。青彫れになつて濱町河岸に引上げられたのや眞ッ黑に焦げたの、煉瓦の下でへしやげたの、其の數十幾萬。其の一人々々が貴い人間の生命であつたのに、顧るものは殆んどない、あんまり氣の毒だから回向してあげようと考へた。

九月九日、本多總裁親下た總帥に、名古屋から入京した同友編輯長及び岩野海車少將、內田誠大郎氏等の一行、燒野ヶ原を自働車を驅つて慘死者の跡を訪れた。

變り果でし哉、嗚東京!、草より出でて、月、草に入ると聞えし武藏野の昔に復つて、見れども見れども悉く煉瓦の屑と、赤茶けた亞鉛板と、燒けた灰と計つかりだ。電線の切れて蛇の樣に街路に橫つた上を、唯一の交通機關として自働車は氣狂ひの樣に驅つて行く。路の兩側をそろ〳〵そろ〳〵罹災者が歩いて居る。用事はない筈だ、目的もなからう、然しバラックの假住居に尻は落ち着かない、止なく出掛けて、止なく歩いて居る、飢えて、疲れた足を引づつて、喪家の犬の樣に……。

吉原の裏の鉄天地畔に來た。道の片側に數百の人が佇立して居る、押し分けて道入つたら、小さい池の側に、五六十人慘死者が橫つて居た、柳の枯枝に南無妙法蓮華經の旗を立てゝ、親下た尊師に法華經讀誦品偈を讀誦した。地震と同時に廓內三ヶ所から火を發した、襤褸の儘に飛び出した遊女は、大門へ殺到したが、狹い道は幾千の人を呑吐しない、引返して三方の非常口へ向つたが、矢張り同じだつた、血氣な男は塀を越へて逃れたが、女と子供は病院裏の鉄天池畔に集つた。時、千束町方面に發した火は既に裏から池に迫つた、廓內の火も猛烈とし

て寄せて來る。見よ、三百坪の小地域を殘して、四邊は悉く火であつた。ヘロ〳〵と覺者の赤い舌の樣に、蝙は雲に纏く、雨の樣に火の粉は降つて來る、サツト龍卷が起つた、「助けてくれい」と幾千の口がさけぶ、思ひ切つて廣れ水の池へ飛び込んだが、池は湯になつて沸いて居つた、水は淺いが深さは丈夫に達した、燒け死んだもの、溺れて死んだもの、其の數約二千。全身直つ黑になつたのが、水でぬる〳〵になり、そして髮の毛は燒けてしまつて全るきり殘つて居ない、女だか男だか分らない、無慘の死骸が私達の前に横つて居るのだ。一生懸命に法華經を讀誦した、讀んで「衆生刼盡きて、大火に燒かるると見る時」の偈に至る、感慨無量だ。直に經文の知く、恐しの刼火は須臾に興ひ來つて、幾萬の生靈は燒かれたのだ。經文は續く「我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり」愚しき人達よ、物質の榮華に酔ふて、何等の信仰なく、淺薄な文化の夢に憧れて居つた、そして彼等の人達にはありし吉原は人生の歡樂郷であつたのだ。此無慘の溫畔から相去る數十歩、そこには大廈高樓軒を連ねて、夜通し明るい電燈が點つて居つた、艶めかしい絃歌の聲が風に斷續して、幾千の化粧の女が、若い人達の血を湧かせて居つた。宗教も、信仰も、一切は物質の歡樂に嗤笑されて居つたのに、その面影は今何處ぞ。「我が淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて」と、信仰なき衆生は燒け盡されて、私達の前に横つて居るではないか、氣が付いてよく見ると、五六十人ではなかつた、池の周圍を繞つてす—つと向ふまで死屍が横つて居る。讀經を終つて立ち去らうと振り復つたら、路傍に佇立して居つた幾千の人々が、齊しく合掌して私達の方を向いて居つた。

仲ノ町を抜けて聖天町を眞つ直に、右折して十二階裏に出た、東京の名物が二つに折れて、下に住んだ覺性の女は幾百の家と共にへしやげた、まだ少しも後片付けはしてなかつたが、風が吹いて來ると凄い程臭い臭がする、下積みになつて、サンと死んで居るのだらうと想像した。

淺草區役所跡で、燒いた慘死者の骨を拾ふて居るのに回向して、雷門前から淺草橋に向つた。大變暑い日であつたが、遠慮をして自働車の幌ははづしてあつた、咽喉が乾いて來た、時刻は正午を經過して居る、空腹を感じた、日陰に車を寄せて中食をと考へて運轉手に命じたが、すぐ氣がついた、あの廣い大東京、燒け殘つた山の手を除いて、木陰に車を止めてお茶一杯飯む所は殘つて居なかつたのだ、道の兩側に繁つて居つた綠の並木は、柳も、ポプラも、悉く燒けてしまつて影もない、幾十萬の家は、木造も、石造も、コンクリートも、すつかりへしやげて、燒けて、見渡す限り目にさへぎるものとてはなく、嗚呼廣い我東京！　殆んど東京を第二の故郷として、其の中に抱んで居つて、今始めてその廣きに驚く。雨は十數日降らない、水道は破壞されて居る、一陣の狂風に捲いて、土埃りと、燒けた灰とが、蒙々として飛ぶ、どこにも車を止めて中食を辯ずる所はなかつたのだ。

濱町河岸に水死者に回向して、兩國橋を渡つて被服廠跡に向つた。三萬四千の犧牲者を出したと云ふ、大体推察して行つたが、愈々現場に臨んでは唯驚くの外なかつた。死屍累々と云ふ言葉を書史で見るが眞に文字通りの死屍累々だ、人の上に人が、人の下に人が、五人も七人も折り重つて倒れて、死骸の山がす—つと、果度もなく三丁も五丁も續く、總面積十數萬坪と云ふ曠野に、木一本、家一軒無く、そしてその全面積が、眞つ黑に焦げた慘死者の山なのだ、之が人間の世の事實なのか、……フト脚下を見た、路傍の小溝にも、矢張りゴロ〳〵慘死者が横つて居る、嗚！

路の傍へに立つて回向せんとした時、見知らない信者が來て、向ふの方に格好の所があるからと云ふ、案内されて、曠野の眞ん中の小さい丘の上に立つた。

本多大僧正親下の御經讀誦の聲は、靜に慘死者の上に響いて行く、一行は特に眞剣になつて幾萬の生靈の弔はうとした。……見よ、丘の周圍に累々と積まれた一々の死屍は、煙を發して燃えて居るではないか。幾萬の死骸を現場で處分するのだ、盡となく、夜となく、燃して居たとて、何の不思議があらう、そして薪材がないから、死骸にすぐに油を注いで、湯つた壓芥をくすべる樣に、プス〳〵死骸の山がくすぶつて居るのだ。私達は四周火の中に立つて居た、暑くて暑くて堪らない、蒙々と煙は雲と捲いて、太陽は爲に赤黑う、鈍い光を投げて居る。サクと壓風一陣、呼氣はつまつて、聲は出ない、地獄の臭いとでも云ふのであらうか。讀經を續けるのに堪えない、目を閉ぢて、一心に御佛を念じた。如來の使として、地獄の中に立つて、地獄の衆生に法華經を誦するなりと祈つた。漸くに讀經を終りて、玄題讃を高く風に聽かせて、累々たる幾萬の慘死者の周圍を巡つた。

大東京が刹那に破壞せられて、十一ヶ所に火を發した本所深川の人達は、逃路を失つて、唯一の安全地帶として茲に殺到した。が、彼等は死生の岐路に立つて、命を奪ふべき鎗鈔や御召の着物は行李に詰められて、千數萬坪の曠野に山の知く積まれた、見る〳〵火は被服廠跡を圍んだ、眞つ赤な焔は天へと燒える、嘉は隅田河なんだが、幅百間位の河が何にならう。火の塀に圍まれて中の温度は百四五十度の高熱に上つた、神の樣な火の粉が飛んで來る。欲と虚榮の結晶せる荷物が燃え出した、周圍も火、中一面も火、恐しい龍卷が起つた、人も行李も空中に捲き上げらるゝ事十數丈、四周の氣つ赤な塀は、す—つと人々の頭上を辷でる。「熱いッ」と幾萬の生命が呼んだ。再び龍卷が襲來する、「熱いッ」と又呼ぶ。三度龍卷が起つて、三度「熱いッ」と呼んで、メタ〳〵メタ〳〵と幾萬人が焚れた。慘又慘！

此の時、誰が命を助からうと考へた者があらう、唯、最後の希望は最も簡単に、そして最も苦痛少くして死にかつたのだ。不思議に命を拾つた人の物語りに、「あの混雜の際、三人の子供を連れて居つた夫婦連れが喧しく爭つて居た、何だらうと注視すると、母が小さい幼兒を跨に挾んで殺した、父が他の子供を殺した、せめて一思に殺してやるのが親の慈悲と考へて、可愛いゝ子供を父が殺そう、母が殺そうと爭つて居たのだ」之が實際に人間の世の出來事であらうか、焦熱大焦熱地獄とは、すぐ目の前に横つて居るのではなからうか、如來の大藏經は、開展せられて大東京の眞ッ中に現在せるのを私達は見たのであつた。

× × × ×

恐怖と混亂の巷に
警告を疾呼すメガホン隊

大正の立正安國論だ、天變地天、饑饉疫癘、隣を接して、民衆の大半は廢滅せられ、內憂外患競ひ起つて、日本國の國體は脅かされないと、誰が保證する事が出來よう、大震火災は來るべき大災厄の緒口ではなからうか。

軍隊の活動に秩序は餘程恢復せられた、機宜の最令に流言はパッタリ止んだ、人心は幾分安定しかけたが、然しそれは唯表つすべりの形式丈ではなからうか。見よ、混亂の巷に警告を疾呼する大正の偉聖日蓮を！　宣傳服の襟高うからげて、草鞋に緒の脚半ジッカリとしめ、白の襷を斜めに、或者はメガホンを、或者は高張提灯を提げて、焼け殘つた帝都の內外到る所に、街頭人心の安定と、思想の健全とを說く。

焼野ヶ原に慘死者を弔つた本多總裁閣下は、其翌くる日我聯司令部に福田司令官を說いた。帝都の復興は精神の方面から着手されねばならない、數十萬の警告書は大混亂の眞さ中に印刷せられ、百餘の宣傳隊は夜の東京を縱橫に驀ふ。警告に曰く、

我々國民は天災に關する御詔勅の聖旨を奉戴し、人心の安定と、思想の健全とに努めねばならない。

今度の災害を試練として、日本人の人格の優秀と、大日本帝國の國體の健實とを中外に示さねばならない。

自然の力の偉大なるに鑑み、宗教の信仰に目醒めよ。

と、若し國民に大自覺の起らんに、百億の資財と、十幾萬の犧牲者とは、決して涙りには貴されざるなり。昨秋關東平野に行はれし陸軍大演習に、侵入軍の飛行隊は國防軍の守りを破りて、帝都の中空に亂れ飛び、東京全市は悉く灰燼と化し去りしなりき。敵國の襲來に焼かれず、大自然の暴威に警告されし日本國の人々は、更に大正日蓮主義の統領、本多大將正說下の獅子吼に聽いて、眞に理想の日本國を復興せざるべからず。

關西日蓮主義者の代表
帝都に入る

九月二日、新聞の號外は全國の各地に帝都の變を傳へた。東京横濱小田原甲府水戸千葉は全滅し、混亂に乘じて○○○○は內亂を極め、全國東は壞亂の巷となれりと。此の時、大正の日蓮出でざるべからず、大內變を轉じて日本國復興の敎材と警告すべき、國師日蓮出でざるべからず、總裁本多日生說下の身邊如何。

一議も無く決死隊は組織せられた。名古屋と、京都と、大阪と、豐橋と、電報と電話とは閃光の如くに飛んで、關西日蓮主義者を代表せる强行入京の一隊は、國友本誌編輯長を統領に、國體の壕を突破して一路東に向つた。左に一行中のメルチデンと稱せられし見玉君の寄稿を掲載する。

決死函嶺を越えて

見玉常宣

記憶せよ、九月一日午前十一時五十八分。

此の日此の時を以つて有史以來未曾有の大震災は襲ふて巨億の物資と數十萬の生靈とを奪つた。

明治改新以後五十餘年間、吾人の父母が心血を以つて築き上げた吾人の國のキャピタルは、一擧にして烏有に歸し、一朝にして慘澹たる天地を馬開せしめた。

私は此の報を聞き啞然亦啞然數刻たらざるを得なかつた。

私がもとの私に歸つた時、攝政宮殿下は御安態なりや」は、吾人が何ものを感する前にも杞憂し來つた處であるが、第二報は直に吾人に先づ安堵の胸を撫でさせたのであつた。

一憂去つて復一憂、それは、管長猊下の御健在なりや、更に宗門寺院は如何になりしか、と云ふことであつた。

さなきだに惡思潮の圍浸し、邪法邪師の蠢動して若き日本の前途を危くせしめんとしてゐるの時、この一大災厄は益々國家を暗黑裡に誘致せしむるものである。この帝國の危機に臨んで、管長猊下の如き社會人心指導の大統帥の生死を案ずるは、啻に宗徒のみでなく、我邦の心あるものゝ等しく感じたことであらう。

管長猊下と宗門寺院の安否とを案じ急ひつゝあるとき、師國友上人より「至急伴ひ上京する來れ」との急報に接し、旅裝を整へる間もあらばこそ、直に五日夜行の國友上人一行に加つた。

一行は四名、月餘の糧食を携帶し、決死函嶺を越えんと出發した。

時は東京よりの情報頻々として、帝都の全く無政府、無秩序の狀態に有りと傳へられ、一行は益々決死の肚を固め、「記念撮影」を遺身にせばやと——今から考へると餘り元氣に過ぎたやうであるが——東海道を通ずる處までもと汽車に委れた。

函嶺は何れも徒步、山中で西下する避難民の群衆に遭遇し、一層その悲慘なることを痛感した。箱根も何をかやと感えて、小田原、國府津、大磯と夜を日についで急いだ。

疲勞と困憊に惱みつゝも、罹災者に比すれば全く九牛の一毛なりと感じつゝ徒步を進め、漸くにして八日正午頃品川に着いた。

先づ管長猊下を妙國寺に訪れると、嗚々、嬉しや猊下のこの健詩なる有樣を。萬感交々至つて、檢劍に俯伏したまい、禁ずんとし涙流の如くであつた。

翌九日、十日は市內各寺院を訪ねつゝ市中を視察した。慘狀の名狀すべくもないことは、今更喋々を要せまい。

かゝる折柄、管長猊下はこの大災厄に遭ふた人々の思想善導と、人心安定を期する爲に、自ら馬を陣頭に進めて大活動を開始してゐられた。末徒の私どもこの犧牲を受けて二陣、三陣と御供をした。

決死を以つて函嶺を越え、慘慘の帝都に師と共に人の爲に說くの得難い体驗は、私たして如何に嬉しい偉大なものを享受せしめたことであらう。

私は人に謝し、師に謝し、而して聖日蓮に謝するの言葉を知らない。

大12年
12月

關西の幹部を集めて
帝京總本山の緊急會議

強行入京の一隊は、先發は着京の即時、後發は其翌々日帝都を去つた。親下無事との飛電は四方に飛び、着後の會議は總本山妙滿寺の大廣間に開催せられた。緊急の救護事業と、教化運動と、及び罹災寺院の應急善後は即決され、國友松本の兩師は再度關西日蓮主義者を代表して東京に向つた。

震災後の國民の覺悟を
主要都市に獅子吼する
本多總裁の貌下英姿

少しく帝都宣傳の効は災後の民心に現れた、後を野澤將軍に托して鳴呼、日逼上人以後未前の大災厄に未前の英傑日生上人の壓委は、渴仰の道俗の前に現れたのであつた。絶前の區井を初めに、京都大阪神戸豊橋名古屋と、莊嚴なる慘死者の追悼會と、盛大なる大講演會は開催せられた。左に名古屋に於る感況を紹介する。

愛知縣會議事堂の
大講演會

◇目覺しいその宣傳戰——聽衆五千◇

帝都大震災に依つて人心は益々動搖した。これほど痛切に眞摯に人心を行詰らしめたものはあるまい。或るものは迷ひ、或るものは悟り人心は暗危の渦を捲いた。罹災民は勿論であるが、一般國民は如何にして生くべきか、この路に惱んだ。

この時、大震災後の國民の覺悟に就いて、管長本多日生猊下が自ら名古屋市に來つて大獅子吼し、人心を叱咤指導して下さるとの報が來つた。

統一團名古屋支部の人々、立正結社員、婦人會員、逃へる人々を救ふのは之れだと一齊に立つた。

一人でも多く、この大講演を聞かしめ、一人でも多く人々を救ひ、そして吾人の使命を果す時は來つたと一齊に立つたのだ。

「九月廿七日午后六時より愛知縣會議事堂に於て、本多日生猊下大講演會」

と市街至る處の辻に、十日前より立看板を掲げたと共に、同志は身を以つて宣傳に努めた。十數萬枚のチラシは毎夜の如く、市内で最も雜沓する廣小路の路上を始めとして、人足繁き目抜の場所〳〵で、市民に配布された。

一方總指令國友上人は氣鋭の士を率ひて、各方面に東奔西走し、い〳〵講演會開催の數日前より、破天荒の自働車宣傳が開始された。自働車宣傳と云つても自働車からチラシをバラ〳〵撒く位の微音的な活動ではない。自働車を市内を縱横無盡に疾驅せしめて、その上にメガホンを三挺連れて、間斷なく大音聲を擧げて、逃へる人心を叱咤し、開かるべき講演會へ來れと警告するのだ。

移動講演隊と云ふより、閃電的講演隊である。人々は宛然電閃に驚

異の眼を見張る如く、この意表を超越した。宣傳隊に呀ッと驚いた。刻々と宣傳は目覺しく、市内各新聞は一齊に筆を揃へてこの講演會の有意義を書いた。

斯くて九月廿七日の夜は來た、

會場經會議事堂は日沒頃より、聽衆は長蛇をなして會場へ詰め寄せた。五時、五時半、六時と打つと、もう會場は全く立錐の餘地なき迄に聽衆は詰め詰めの盛觀を呈し、會題を續いて來會しつゝあつた。

「開會の辭」が見玉常宣師に依つて宣せられる頃は、四千の人々が階上階下に滿ちてゐた。

「開會の辭」に次ぎ松本堅靖師は「國民性の發露」と題して約一時間、大震災に依つて現はれたる國民性の發露に就いて、得意の大雄辯を振つた。續いて國民崇拜の的となつてゐる本多日生猊下が登壇すると、聽衆は急霰の如き拍手を浴びせた。聽衆は尚ほも詰めかける、さしもの大會場も、全く一人をも入れることの出來ない迄に犇めき、その數五千を注せられた。

日生猊下は、連日各都市の獅子吼の疲勞と、加ふるに風邪に犯されてゐたのを色にも出さず、大聲叱咤、その言々句々は人々の肺腑を抉ぐらずんば止まぬ氣で、皮肉と警句の程に國民性の缺點を羅列し、更に思想問題に入り、國家主義より及ぼして日蓮主義に至る迄、約壹時間中、緊張を續けて講演された。斯くて午后八時三十分、多大の効果を擧げ、丹羽將士の發聲に、一同 天皇陛下の萬歲を三唱して閉會した。（山城の人）

罹災少年救護所開設
國友日猊師の提唱で奮起した
名古屋 佛教少年聯合團

大震災地の罹災少年少女救護事業の急務と有意義とを、名古屋市常德寺法國少年團長國友日猊師上京視察して先づ之を感じ、九月十一日に帰名し、仝日直に名古屋市佛教會、仝市佛教少年聯合團の緊急會議を開かしめ、該問題を提議し忽ち賛同を得、翌十二日より直に常德寺を以つて罹災少年少女救護所に宛て事業に着手した。

先づ名古屋驛頭に救護慰問班を出張せしめ、逃避民の子弟に玩具雜誌を與へて慰問し、その他宿泊なきものは救護所へ伴ひ來りて宿泊せしめ、名古屋市に永住もしたきものはそれ〳〵職を與へて安住せしむるなど、連日晝夜を論ぜず各方面に奔走し、重れて震災地慰問品蒐集と、震災地小學兒童救護の爲、小學校教科書及少年雜誌の蒐集に殆んど十月中旬迄連續的に活動した。

之れに依つて教科書二萬五千部、少年雜誌五千餘部を震災地へ送附した。罹災少年少女は開設以來三百餘人、一時救護の上故郷へ帰省せしめ、或は就職せしめるなど、夫れ〳〵安住の位置に据へた。この罹災少年救護事業は社會から頗る協賛せられ、罹災少年を引受けたき雇主或に貰主など事務所たる常德寺に押寄せ、逃避少年少女を之れに宛てても尚餘は數百の申込みありて、この申込に應ずること到底不可能の盛況を呈した。

罹災少年少女救護事業は、尚今後も永續することとし、雇主、貰ひ

大12年
12月

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

主よりの申込書を一纏となして、震災地の市社會課、內務省社會局へ申込み、表面的の運動は十月末日一時休止した。

罹災少年少女救護事業は、最も時宜に適したるのみならず、之れに依つて名古屋の諸救濟事業を刺戟し、之れに依つて名古屋人士に善人の事業の如何に眞值であるかを感激せしめる等、多大の効果を收めたのであつた。

編輯局より

本誌九月號は丁度出來上つた所を、印刷所三秀舍と一緒に大震災にて燒かれました。其の後東京はまだ混亂が恢復しませんから、兎に角名古屋で本號を印刷しました、今後は平時に復して、御期待に副ひたいと存じます。

廣告

大僧正本多日生猊下題字
醫學博士鳥潟先生序文
胃腸病專門醫士友廣善夫著

通俗 胃腸と食物論 全

正價金一圓三十錢 送料八錢

文化の進むにつれ胃腸病は多くなる。殊に現代に於て尤も其傾向あるが如し、而して胃腸病は他病治癒上に著しき關係を有す其古來より行はれつゝある粥に梅干と云ふ養生法は多くの場合不可不合理なり。其他如此に間違はれたる事柄多きが如し其は本書讀了によりて思ひ半ばに過ぐるの箇所多からんかされば多少にても世を益せんとの微志により我が本志愛讀者に左記特價提供をなさんとす乞ふ品切れとならぬ內早く申込まれよ、但し直接に當院宛のみに限る

特價送料共前金壹圓也

大阪市南區難波新地五番地丁四二

友廣胃腸科院

電南六八二番・振替大阪五四一四二番

「ア、これは蓮といふ字が書いてある、成る程日蓮聖人の書いたやうな工合に疋が大分長く伸びて居る」「ア、これは赤い鉛筆で、木の葉見たやうな、繪だか何だか判らぬやうな物が書いてある」といふ風に、皆殘らず當てた。さうしてあとで「本多先生、あなたにも一つ傳授しませうか」と言つたけれども、別に傳授も受けなかつたが、それは實に巧妙なものである。能く千里眼とかいふやうなものは、當つたり外れたりするのがあるけれども、荒川君のは幾らでも必ず當る。之を彼は號けて「指頭觀」といつて居る。それから「書物でも讀めるか」と聞いたら、「落つけば讀める」と言つて居つた。左樣なことも現在生きて居る人でやる者があるやうな譯であるから、絶對の佛が神通の力として、通常人の爲し能はざる作用を現すといふことを、一概に否定することは出來ない。併ながら又濫りにこんな事を言つて、迷信のやうなことをいふ譯ではないけれども、茲は佛の所謂全智全能の境界をいふのであるから、如來はそこに廣大なる內面の本體および作用を有つて居るといふことを言つたのである。

「如來秘密神通之力」といふこの八字が、大體本佛を顯はす所の、本佛の體と作用とを說いた言葉であつて、之を詳しく說き分けたのが壽量品の全文になつて來る。纏めて來れば壽量品の全體は如來の秘密神通の力を說きしものであるといふことが言へる。この八字の演題を揭げて如來が說明したことになる。それ故にいきなりその大事な所を言つて、この事柄をお前等は知らなければならぬ、如來を皮相から觀て居るが故に、如來の秘密神通の力を知らないのであるといふことを言はれた譯である。その下の

言葉は即ち「一切世間の天人及び阿修羅」――世間の人達といふことであるけれども、それを三善道を擧げたのである。天と人と阿修羅を擧げたので、これは菩薩達に對していふのだけれども、少し聽衆を貶して見て居られる譯である。これにもいろ〳〵妙樂大師の解釋もあるのでありまして、本佛を眞に意識しない限りには、他の智慧や德が發達して居つても駄目だといふ意味で、これは貶せられたものであるというて居ります。「それは妙樂の解釋でありますが、兎に角一切世間の天人及び阿修羅、大勢の者共は、皆今の釋迦牟尼佛はこの間佛に成つたとのみ考へて居る、久遠の本佛といふ事を知らぬ。即ち「釋氏の宮を出でゝ」といふのは、迦毘羅衛城の釋迦氏の王子と生れて、それから夜半に王城を拔け出でて六年の行を積んで、伽耶城といふ所を距ること遠からざる菩提樹の下に坐つて、さうして無上正覺を得たのであると思つて居る、道場といふのは佛道を成就した所であるからいふのであります。「阿耨多羅三藐三菩提」といふのは、大變長い言葉であるけれども、之を約すれば無上覺といふので、この上も無い完全なる覺を得た、その覺といふ事の中には無論道があり眞理があるのであります。眞理に合するが故に覺であるから、菩提といふ事は兩方に解釋が出來る、無上道ともいふので、この上も無い道と言つても宜い、それを人格につけて言へばこの上も無い覺である、菩提といふ言葉は兩方に解釋されて居る。さういふ風にお前達はこの間佛に成つたと思つて居るけれども、實はさうではない、この釋迦牟尼が眞實の成佛をしてからどの位の年數を經て居るかといへば「無量無邊百千萬億那由佗劫」である。これは

梵語の數量であつて、迦も支那などには翻譯すべき文字がない、この數量の順序が華嚴經などに詳しく說いてありますが、非常に桁が進んで居つて、之を翻譯する言葉が無いから梵語の儘になつて居る。「劫」といふ事なども印度に於て使つたので、日本などには迦も斯ういふ言葉は無い、碁を打つ時に「劫」といふが、殆んど無限をいふて居る、何遍でも取つたり取られたりして果しが無いから之を「劫になつた」といふ。けれども素々さういふ意味ではない、劫は時といふ事で、劫欲といふ、非常に長い時をいふのである、どの位かといふと、その數へ方はいろ〳〵ありますが、細かいことはどうでも宜いとして、マア千年に一度天人が天降つて來て、さうして軟かな羽衣の袖で大きな巖を一遍摩つて又天に歸る、それから又千年經つて降りて來て、ちよつと軟かな衣で巖を摩つて天に歸る、さうしてその大きな巖がとうとう摩り減らされて無くなつてしまふ位の時間、それを「劫」といふので、兎に角非常に長いことを言つて居る。その劫といふ長い時間を一つの目安にして、それが無量無邊百千萬億那由佗といふ長き劫を經過して居るといふのであるから、それはモウ非常に長い、數へることも何も出來ないやうな時間を言ひ現す言葉ナンである。併ながら如何に長いとしても、長い〳〵といふだけでは始めがあることになるが、これはその長き時に寄せて無限を說明したものぢやといふことになつて居る、それは羅什三藏がこの法華經を譯した時に、直ぐに弟子の僧叡といふ者をしてこの意味を解釋せしめて居る言葉がある、それは唯だ永いといふ事は何處にでもある、寧ろ永いといふだけならば、太古とか無限といふことは何處でも

いふ、けれども唯だそれだけでは却つて判らぬ、そこで永い〳〵年數を擧げて說明するが、それは年數を說くのではない、その長い年數を經過しての無限であるといふのであります、だから之を「數に寄せて非數を說くと」言つて居る。數に寄せずして非數を言うた所は寧ろ何處にでもあるけれども、壽量品は數の永いのを通してさうして無限を說明するのである、だから「數に寄せて非數を說く」と羅什三藏が僧叡をして解釋せしめて居る、これは大事な點である。それ故に日蓮聖人などの使ひ方は「久遠無始」と言つて、久遠といふ言葉を使へば直ぐあとに無始といふ言葉が附いて來る『本尊鈔』にもあります「無始の古佛なり」とか、久遠無始といふ熟字を使ふのは、唯今申した數に寄せて非數を說くといふことである。弘法大師あたりは之を數に寄せた方だけ考へて、非數といふ事を見ないやうな振をした、性質の惡い人である。「ナンボ古い〳〵」と言つた所が始めがあるぢやないか、そんな數などを算へてあるといふのは兒戲に類する事ぢや」といふので、戲論と言つて壽量品を非難した、それを日蓮聖人が憤激して攻擊した譯でありますが、これは弘法大師が惡いのであります、この壽量品の說を戲論ナンといふことは、弘法が如何に慢心したからと言つても不都合な話であります。日本の文學者などは、そんな事は何も知らんから「弘法はえらい人ぢや」ぐらゐのことを言つて居るが、佛敎の正統敎義からいへば、弘法などは叛逆者である。

一一七、是れより來た、我れ常に娑婆世界に在つて說法敎化す、亦餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

この所は顯本の事が終つたから、今度はその長い年代の間何をして居つたかといふので、その活動を說いたのであります。この佛が居眠をして居る譯でもなければ、自分が唯だ一人法樂を貪つて居る譯ではない、佛に成つて晝寢に行くとか、御馳走を食ひに行くとか、佛に成れば幸福だとかさういふことは考へて居らない、その佛に成つてから以來、やはり衆生濟度を目的にして活動をして居る。「是れより來た」といふのは、この始め無き久遠無始の成道からこちらにといふことで、その間この汝等の居る娑婆世界から離れては居らない、此處に於て何時も說法敎化して來た、併し「此の處」といつた處に拘束されては居らない、同時に樣々の國に身を現して活動をして居る、餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導いて居る。そこで縱に三世に高く、橫に十方に遍ねしといふことが出で來る譯である。この普遍といふ事が非常に大事である、哲學で云ふ絕對を說かうとすれば、時間を無始無終に超越し、包括するといふことにならなければならぬ、それから空間を包括して來なければならぬから、そこでこの娑婆世界にあつて說法敎化すると同時に、餘處の多くの國々に於てもやはり衆生を濟度したといふので、非常に廣い。基督敎などは地球だけが世界ぐらゐに考へて居るが、今日の天文學が進步して來てもモウ早やさつぱり話が判らぬ位のことである。佛敎はそこに行くと全宇宙、全法界の見方が、今のどんな進步した哲學や科學から見ても、少しもマゴ〳〵

しない。この娑婆世界に於て衆生を教化すると同時に、十方に活動して居るものである。嘗て井上圓了博士が「佛教がこの永い堂々たる大きな宇宙を說くだけの事でも、非常に哲學思想が進んで居る」といふことを言ひましたが、それはさうでせう、儒教などを見てもそんな長い言葉もなければ、そんな大きな思想は流れて居らぬ、日本の建國史などを見てもさうである、そんな大きな觀念は無い。數の觀念といふものは哲學思想を代表するものでありますから、そこに餘程印度思想が進歩して居つたと見ることが出來るのであります。斯ういふ工合の說明式は容易にありませぬ、それは他の宗教と比較して御覽になれば直ぐ判る、大本教なら大本教の神樣はどうちやと言つても、丑寅の金神といふやうなもので、その金神が何處に居つた此處に居つたといつても、洵に俗臭紛々たるものであつて、哲學の研究に多少でも思想を練つた者は、問題にならぬやうな愚な事である。けれどもこの壽量品の說明式は、高遠なる哲學的理想を味はつて來た者が考へると、最初の出方からして中々一筋縄でないといふことが直ぐ判る、阿彌陀教などを讀んで見たら、いきなり頭から「これは駄目だ」といふことが判る、詳しく說明する迄もない。壽量品は實に絕對を說明する爲に無限の時間から說き、それから空間を抑へ、そこに活動の順序をずつと說いて居られる、この說明式が完備して居ることが、宗教として優れて居る所以である。絕對を唯だ絕對として「完全ちや」「圓滿ちや」「說明などせぬのちや」といふやうなことは、どの宗教でも能くいふことであるが、併しそこに說明の巧拙が現れて來る、それに依つて宗教の優劣が判る

譯であります。

一一八、諸の善男子よ、是の中間に於て、我れ然燈佛等と說き、又復其れ涅槃に入ると言ひき、是の如きは皆方便を以て分別せしなり。

茲はその長き間、衆生教化の方法に於て方便を用ひたことを說明して居るのである。「方便」といふのはどういふ意味かといふと、衆生を救ふに就ての方法でありますが、それが最も好く適當した方法を方便といふのである、即ち應用の全きものを方便といふて宜しい。日本で普通に使ふのは餘程墮落して居るので、「嘘も方便」といつたり、遣り損つても「あれは方便でしたから」といふやうなことで誤魔化す、さういふ意味合とは違ふのである。所謂最善を盡して誤たぬ方法といふのが方便である、それは戰爭をする場合に、例へば對島の海戰などに於て、日本海軍がバルチック艦隊を擊滅したといふやうなもので、あれは方便その宜きを得て居るといふことが出來る、敵の艦隊がやつて來た場合に、日が暮れゝば水雷艇で襲擊しなければならぬ、夜が明ければ大艦隊を以て飛出して行くといふやうに、一分間も餘裕なくして最善の努力をして居る、それが即ち敵を擊滅する目的からいへば方便宜きを得たと言へるのである。それと同じやうな意味のものであつて、遣り損つた事を、「あれも方便です」などといふのは、非常に誤解して居るのである。

そこで「諸の善男子よ、是の中間に於て」といふのは、その久遠無始の成道から今日娑婆世界に出て來る中間をいふので、これは釋迦が佛を三代に分け

て居る、久遠の根本の佛と、それから中間に活動した佛と、今度天竺に出た佛と、その中の中間の活動が茲に說かれて居る。さうしてその長い間出て來る度に「我れ然燈佛等と說き」で、その間何時も釋迦といふ名前では出て居らぬ、今度釋迦氏の迦毘羅衛城に出たから釋迦牟尼佛と云ふ名があるけれども、他の名前といふものはその時〳〵に依つて然燈佛と言つたり、その他樣々の數へられぬ程の名前がある、それは皆今の釋迦牟尼の久遠實成以來の中間の時の名前である。さうして「又復其れ涅槃に入ると言ひき」といふのは、その時の必要に應じて働いて、用事が濟めば涅槃にも入つた譯である。それ故にその中間の年代に名前が違ひ、又した仕事が多少色を變へていろ〳〵やつたからと言つても、皆この釋迦の作用に外ならぬものである。それはその時の必要に應じて最善を盡してやつた仕事であつて、方便を以て左樣に分別した譯である、その時に適當した方法に依つて衆生を敎化して來たのである。だから名前が違つたやうな事に依つて、佛の本體までも違ふ、今の釋迦牟尼の働きではないと思うてはならないといふ事を言はれたのである。

これは皆一つの釋迦の活動を說明して來て居るのでありまして、即ち時間の上の事と擴がりの上の事とその間に斯ういふ風にしたといふ事を說いたのであるが、そこでその釋迦牟尼が衆生に對する時分に、どういふ態度を以て敎化をしたかといふ事に就て、次に、その佛の慈悲救濟といふ、宗敎の大事な點を說明して來るのである。唯ださういふ大きな哲學風な時間空間を超越すると云ふやうなことは言つて居らぬ、次には洵に適切な意味に於て、その佛が斯樣

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民敎化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四十錢　送料一部金十八錢

○大藏經要義　一部金參圓八十錢十一卷近既刊　送料一部金拾八錢年年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢送料一部金貳錢　上製金五拾錢送料一部金貳錢
○佛敎信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上講讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一部	金參拾錢	送料一錢
半ヶ年	金壹圓七拾錢	送料共
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料

一頁	金拾圓	前金の事
半頁	金六圓	
四分ノ一頁	金參圓半	

大正十二年拾月二十七日印刷納本（第三百四十四號）
大正十二年十一月一日發行
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

不許復製

編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄　名古屋市東陽千種町字五反田廿五番地
印刷所　三登舍　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯所　名古屋市東區田代町字城山七十七番地　電長名古屋東五四八七番

目次

詔書と日蓮主義……本多日生
工場教化に就て……本多日生
社會部より……武田顯龍
記事報道……

第廿七年十二月號